

平成30年度

郡山市中學生長崎派遣事業

「2018 ナガサキへのメッセージ」
報告書

原爆殉難者名奉安

郡山市核兵器廃絶都市宣言

(昭和59年6月15日議決)

世界恒久平和実現のために、核兵器を廃絶することは、人類共通の願望である。

核兵器は人類と地球の命運を左右するにもかかわらず、新しい軍事技術の開発が続けられている。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、平和を愛するすべての国の人々とともに、人類の安全と生存のため不断の努力を続けるべきである。

郡山市は、日本国憲法に基づいて、核兵器の完全廃絶と軍備縮小を全世界に訴え、人類の願いである世界平和の実現を希求し、核兵器廃絶都市であることを宣言する。

平成30年度郡山市中學生長崎派遣事業

「2018 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて



郡山市長 品川 万里

1945年8月。広島と長崎に投下された原子爆弾による熱線と爆風は、街を一瞬にして廃墟に変え、数多くの尊い命を奪いました。また、放たれた放射線は人々の心と体に大きな傷を与え、生き残った人々も今なお後遺症で苦しんでおられます。

当市におきましても、4度にわたる空襲により大きな被害を受け、500名を超える尊い命が犠牲となりました。

あの悲惨な戦争の終結から73年が経過し、この間、我が国は目覚ましい発展を遂げ、平和国家としての道を歩んでまいりました。しかし、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを決して忘れてはなりません。被爆者の平均年齢が82歳を超え、被爆者が減少していく中で、核兵器使用により引き起こされた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、その廃絶を願う全ての人々の思いを次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生きる私たちの使命であります。

そのため、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市では、「平和を考える市民の集い実行委員会」との共催により、次代を担う中学生を被爆地へ派遣する事業を平成8年度から実施しており、今年も、市内各校の代表生徒に役員を加えた派遣団33名を長崎市へ派遣いたしました。

派遣された中学生の皆さんは、原爆資料館や永井隆記念館の見学、平和祈念式典への参列をはじめ、青少年ピースフォーラムでの被爆体験講話や平和学習、交流会などへの参加を通して、戦争の悲惨さや原子爆弾による被害の恐ろしさ、命の大切さなど、たくさんのことを学んだことと思います。また、全国から集まった同世代の青少年と、戦争のない世界の実現のために意見を交わすとともに、交流を深めることができたことと思います。中学生の皆さんには、被爆地長崎での経験を今後の成長の糧にさせていただくとともに、4日間の研修を通して学んだことを家族や友人などできるだけ多くの方々に話し、平和の大切さを伝えていただきたいと思います。

この報告書には、派遣された中学2年生29名が平和の尊さや核兵器廃絶の必要性について学んだことや感じたこと、平和への思いがそれぞれの言葉でまとめられています。この報告書が一人でも多くの方々にご覧いただけることを願うとともに、平和について考えるきっかけとしていただければ幸いです。

長崎市の皆様には、本市派遣団を今年も温かく迎え入れていただき、厚く御礼を申し上げます。また、長崎平和宣言に込められた「福島の皆さんを応援していきます」とのメッセージに、大変勇気づけられるとともに、復興の歩みを一段と進めるべく改めて思いを強くしたところであります。

結びに、本事業の実施に当たり多大なる御支援、御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝を申し上げまして、挨拶といたします。

平成30年度郡山市中學生長崎派遣事業

「2018 ナガサキへのメッセージ」報告書に寄せて



郡山市教育委員会教育長 小野 義明

市内各中学校から1名ずつ選出された皆さんは、平成30年度郡山市中學生長崎派遣団員として、平成30年8月7日から4日間長崎市を訪れ、長崎市長に「平和へのメッセージ」を伝える重要な役割を果たす中で、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を強く認識されたことと思います。

73年前の8月9日、一発の原子爆弾によって、長崎の街は廃墟となり、多くの尊い命が奪われました。被爆された方々は、癒えることのない傷を負い、今もなお、原爆による後遺症や健康への強い不安に苦しみ続けており、また、被爆者の平均年齢は82歳を超え、戦争が生んだ被爆の体験を今後どう受け継いでいくのかが問われています。

そのような中、東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故を経験した中学生の皆さんが、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加するなど、実際に長崎の地に立ち、長崎の人々が歩んできた長い復興の道のりに触れることができたことは、大変意義深いことであると感じています。互いに助け合い、励まし合い、一致団結して街の復興に向けて力強く歩んできた姿を、自らの目で確かめ、自らの耳で聞いた体験は、「未来の平和」を考える上で、きっと大きな財産になったことと思います。

この報告書は、派遣団の皆さんが、今回の派遣を通して実際に感じ取ったことを、平和へのメッセージとしてまとめたものです。どのページを見ても、皆さんの若い感性でとらえた平和への思いが、率直な言葉でつづられています。

表現の違いこそあれ、参加した皆さん全員が、核兵器を使う愚かさや、平和の大切さに触れるとともに、「未来の平和」のために自分自身ができることについての強い決意を述べており、大きな感動を覚えました。

どうか、派遣団の皆さんには、この体験で感じた想いを多くの友人に語り伝えるとともに、人類の未来を築き上げていくために、持てる限りの「英知」を結集してほしいと思います。同時に、この報告書が一人でも多くの皆様に読まれることを切に願っております。

結びに、所期の目的を達成され、立派な報告書を完成させた中学生の皆さんと、派遣に御尽力いただいた関係者の皆様をはじめ、御協力をいただいた保護者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本市の中学生を温かく受け入れ、全世界に向けた長崎平和宣言の中で「東日本大震災の原発事故から7年が経過した今も、放射線の影響は福島の皆さんを苦しめ続けています。長崎は、復興に向け努力されている福島の皆さんを引き続き応援していきます」というメッセージを発信していただいた長崎市長をはじめ、長崎市の皆様の益々の御健勝と、長崎市の御発展を御祈念申し上げ、挨拶といたします。

目 次

【事業内容】

| | |
|-----------|---|
| 平和へのメッセージ | 1 |
| 事業概要 | 2 |
| 派遣団名簿 | 4 |
| 研修行程 | 6 |

【研修風景】

| | |
|-----------|---|
| 集合写真 | 7 |
| 写真で綴る研修風景 | 8 |

【団員報告】

| | |
|---------------------|----|
| 青山 怜平 (日和田中学校) | 13 |
| 長谷川 珠姫 (行健中学校) | 15 |
| 橋本 早知子 (明健中学校) | 17 |
| 大竹 統也 (安積中学校) | 19 |
| 杉原 礼菜 (安積第二中学校) | 21 |
| 佐藤 紘夢 (三穂田中学校) | 23 |
| 三浦 あゆ奈 (逢瀬中学校) | 25 |
| 村越 透斗 (片平中学校) | 27 |
| 熊田 桃子 (喜久田中学校) | 29 |
| 増子 知希 (熱海中学校) | 31 |
| 小山 美樹 (湖南中学校) | 33 |
| 米本 響 (守山中学校) | 35 |
| 濱津 優子 (高瀬中学校) | 37 |
| 降矢 優之介 (二瀬中学校) | 39 |
| 橋内 祐奈 (郡山第一中学校) | 41 |
| 木村 拓真 (郡山第二中学校) | 43 |
| 高橋 萌乃 (郡山第三中学校) | 45 |
| 鈴木 拓紀 (郡山第四中学校) | 47 |
| 横山 彩華 (郡山第五中学校) | 49 |
| 田中 直太郎 (郡山第六中学校) | 51 |
| 高橋 優芽 (郡山第七中学校) | 53 |
| 須釜 陽斗 (緑ヶ丘中学校) | 55 |
| 大内 怜奈 (富田中学校) | 57 |
| 関根 拓海 (大槻中学校) | 59 |
| 橋本 茅乃 (小原田中学校) | 61 |
| 伊藤 楓愛 (宮城中学校) | 63 |
| 横田 大晃 (御館中学校) | 65 |
| 小林 瑚雪 (郡山ザベリオ学園中学校) | 67 |
| 鈴木 英一郎 (西田学園) | 69 |

§ 事業内容 §

戦後73年を迎え、原子爆弾で亡くなられた多くの方々に哀悼の意を捧げます。

また、今なお被爆による後遺症に苦しんでおられる皆様にお見舞いを申し上げます。

貴市に投下された一発の原子爆弾は、尊い命を奪い、街を破壊し、今なお癒えることのない深い傷を与え、「70年間は草木も生えない」とも言われた壮絶な被害をもたらしましたが、市民の皆様のたゆまぬ御努力により、今日の緑豊かな国際都市としての発展を築かれました。

また、平和に対する揺るぎない御意志のもと、自らが受けた惨状を伝えることで核兵器の脅威を全世界に訴え、「核兵器廃絶」並びに「恒久平和の実現」を目指し、世界の先頭に立って行動を続けておられますことに、心から敬意を表します。

このような中、昨年は、北朝鮮により度重なる核実験が強行されるなど、世界の平和が脅かされるとともに、「核拡散」の動きが強まりましたことは、決して許されるものではありません。

戦後73年の歳月の経過とともに、戦争や原子爆弾の恐ろしさを直接経験された方々が少なくなってきておりますが、今日の平和が、多くの方々の犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを次の世代に伝えていくことは、平和な時代に生き、その幸せを享受する私達の責務であります。

このため本市では、次代を担う中学生を貴市に派遣し、被爆地を訪れ、被害に遭った場所に立ち、全国から集まる同世代の仲間たちと意見を交わし合うことで、「戦争の悲惨さ」や「平和の尊さ」、さらには「命の大切さ」を深く理解し、共有することを目的として、様々な研修活動に参加させていただきます。

この貴重な経験を通して、参加者一人ひとりが「核兵器廃絶のために必要なこと」や「平和のために自らができること」を学び感じ取り、より多くの人々に伝えてくれるものと期待しております。

今後とも、国内外の自治体の皆様と連携を図りながら、貴市で起きた惨禍が二度と繰り返されることのないよう、「核兵器のない世界」並びに「世界の恒久平和」の実現に向け、取り組んでまいります。

さて、本市は、東日本大震災並びに東京電力福島第一原子力発電所の事故により大きな影響を受けましたが、発災から7年余が経過する中、貴市をはじめ数多くの皆様からの御支援、お心配りを頂戴しながら、課題を一つひとつ乗り越え、復興の歩みを進めてまいりました。長崎市民の皆様には、是非、本市へお越しいただき、新たな未来へと歩みを進めている姿を感じていただければ幸いです。

結びに、「核兵器廃絶」並びに「世界の恒久平和」の実現を強く念願いたしますとともに、貴市のますますの御発展並びに長崎市民の皆様の御活躍と御多幸を心から御祈念申し上げます、メッセージといたします。

平成30年8月9日

長崎市長 田上富久様

郡山市長 品川萬里

平成30年度郡山市中學生長崎派遣事業 「2018 ナガサキへのメッセージ」 事業概要

1 趣旨

市民の多くが戦争を知らない世代となりつつある中で、今日の平和が、先の大戦の大きな犠牲の上に築かれたかけがえのないものであることを忘れてはならない。

これを次代に伝えるのが今日に生きる私達の使命であると考え、「核兵器廃絶都市」を宣言する本市における平和への取り組みとして、平和の尊さや核兵器使用の悲惨さとその廃絶の必要性を認識してもらうことを目的に、感受性豊かな中学2年生を被爆地である長崎市へ派遣して、研修活動を実施する。

また、報告会及びパネル展の開催や報告書の作成・配布等を通して、本市の取り組みについて広く市民への周知を図る。

2 主催

郡山市／平和を考える市民の集い実行委員会

3 事業内容

(1) 派遣団結団式及びオリエンテーション

- ア 開催日 平成30年7月26日(木)
- イ 会場 郡山市役所特別会議室
- ウ 内容 団員証交付、「平和へのメッセージ」付託、「折り鶴」付託、団長及び団員代表あいさつ

(2) 派遣研修

- ア 派遣先 長崎市
- イ 派遣人員 団員29名、役員4名(団長、副団長、支援者、事務局各1名)
- ウ 派遣期間 平成30年8月7日(火)～10日(金)
- エ 研修内容
 - ・永井隆記念館(如己堂)見学(8月7日)
 - ・平和公園及び長崎原爆資料館見学(8月8日)
 - ・「平和へのメッセージ」伝達(8月8日)

- ・青少年ピースフォーラム（平和学習、交流会）参加（８月８日～９日）
- ・長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列（８月９日）

(3) 報告会

ア 開催日 平成30年11月17日（土）

イ 会場 郡山市役所特別会議室

ウ 内容

- ・被爆体験伝承者による講話（広島市被爆体験伝承者）
- ・派遣団員による研修報告

(4) 写真パネル展・原爆パネル展

派遣団員が研修を通して撮影した写真に自身のメッセージを添えて展示する「写真パネル展」及び原爆に関する資料を展示する「原爆パネル展」の開催

ア 1回目

- ・期間 平成30年11月17日（土）～11月30日（金）
- ・会場 郡山市役所本庁舎正面玄関ホール

イ 2回目（予定）

- ・期間 平成31年2月1日（金）～2月14日（木）
- ・会場 郡山市中央図書館エントランスホール

(5) 報告書

派遣団員による研修の成果をまとめた、『平成30年度郡山市中學生長崎派遣事業「2018 ナガサキへのメッセージ」報告書』の作成、配布

(6) 中学校へのパネル貸出

平和学習等への活用を目的とした、展示希望のある市内中学校への写真パネル及び原爆パネルの貸出し

平成30年度 郡山市中學生長崎派遣団名簿

役 員

| 役 職 名 | 氏 名 | 性別 | 所 属 |
|-------|-------------------------|----|--------------------|
| 団 長 | よ り がね こう いち 壽 金 孝 一 | 男 | 郡山市総務部総務法務課長 |
| 副 団 長 | こん じい けん いち 紺 頼 憲 一 | 男 | 平和を考える市民の集い実行委員会監事 |
| 支 援 者 | おか へ たか し 岡 部 高 志 | 男 | 郡山市立御館中学校教諭 |
| 事 務 局 | すぎ はら たつ ひ 杉 原 達 彦 | 男 | 郡山市総務部総務法務課総務管理係主任 |

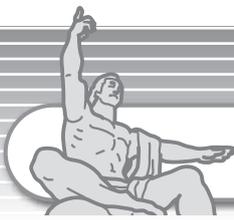
団 員

| 番 号 | 学 校 名 | 氏 名 | 性 別 |
|-----|-----------------------|---------------------|-----|
| 1 | 日 和 田 中 学 校 | 青 山 裕 平 | 男 |
| 2 | 行 健 中 学 校 | 長 谷 川 珠 姫 | 女 |
| 3 | 明 健 中 学 校 | 橋 本 卓 知 子 | 女 |
| 4 | 安 積 中 学 校 | 大 竹 統 也 | 男 |
| 5 | 安 積 第 二 中 学 校 | 杉 原 礼 菜 | 女 |
| 6 | 三 穂 田 中 学 校 | 佐 藤 紘 夢 | 男 |
| 7 | 逢 瀬 中 学 校 | 三 浦 あ ゆ な | 女 |
| 8 | 片 平 中 学 校 | 村 越 透 斗 | 男 |
| 9 | 喜 久 田 中 学 校 | 熊 田 も 桃 子 | 女 |
| 10 | 熱 海 中 学 校 | 増 子 と 知 希 | 男 |
| 11 | 湖 南 中 学 校 | 小 山 み 美 樹 | 女 |
| 12 | 守 山 中 学 校 | 米 本 ひ 響 | 男 |
| 13 | 高 瀬 中 学 校 | 濱 津 ゆ 優 子 | 女 |
| 14 | 二 瀬 中 学 校 | 降 矢 ゆ 優 の 之 介 | 男 |
| 15 | 郡 山 第 一 中 学 校 | 橋 内 ゆ 祐 奈 | 女 |
| 16 | 郡 山 第 二 中 学 校 | 木 村 た 拓 ま 真 | 男 |
| 17 | 郡 山 第 三 中 学 校 | 高 橋 も 萌 の 乃 | 女 |
| 18 | 郡 山 第 四 中 学 校 | 鈴 木 た 拓 の り 紀 | 男 |
| 19 | 郡 山 第 五 中 学 校 | 横 山 あ 彩 か 華 | 女 |
| 20 | 郡 山 第 六 中 学 校 | 田 中 直 太 朗 | 男 |
| 21 | 郡 山 第 七 中 学 校 | 高 橋 ゆ 優 め 芽 | 女 |
| 22 | 緑 ケ 丘 中 学 校 | 須 釜 は 陽 と 斗 | 男 |
| 23 | 富 田 中 学 校 | 大 内 ゑ 裕 な | 女 |
| 24 | 大 槻 中 学 校 | 関 根 た 拓 み 海 | 男 |
| 25 | 小 原 田 中 学 校 | 橋 本 ち 茅 の 乃 | 女 |
| 26 | 宮 城 中 学 校 | 伊 藤 ふ 楓 あ 愛 | 女 |
| 27 | 御 館 中 学 校 | 横 田 ひ ろ 大 あ き 晃 | 男 |
| 28 | 郡 山 ザ ベ リ オ 学 園 中 学 校 | 小 林 こ 瑚 ゆ き 雪 | 女 |
| 29 | 西 田 学 園 | 鈴 木 え い ち ろ う 英 一 郎 | 男 |

§ 研修風景 §



「平和祈念像」にて



写真で綴る長崎派遣研修風景 ①



①7月26日に市役所で結団式を行いました。長崎での研修に向け、団員33名が気持ちを一つにしました。



②8月7日朝、市役所で出発式を行いました。団員代表の鈴木君が、4日間の研修に向けて抱負を述べました。長崎へ出発です。



③福岡に到着、太宰府天満宮を参拝しました。派遣研修中の安全と団員それぞれの学業成就を祈願しました。



④長崎に到着、永井隆記念館を見学しました。平和を願い活動を続けた永井隆博士の生涯に、感銘を受けました。



⑤2日目。平和公園で、濱津さんが学校から託された千羽鶴を、橘内さんが市民の皆さんから託された折り鶴を、それぞれ奉納しました。



⑥3つのグループに分かれて、平和公園と原爆資料館を見学しました。ボランティアガイドの方々の説明に真剣に耳を傾けました。



⑦平和公園と爆心地公園では、園内にあった被爆遺構や祈念碑を巡り、それぞれに込められた平和への想いを知りました。



⑧原爆資料館には、原子爆弾による被害の実相を物語る展示物の数々がありました。核兵器の現状についても学びました。



⑨品川市長より託された「平和へのメッセージ」を、派遣団の代表が原爆資料館の中村館長に届けました。



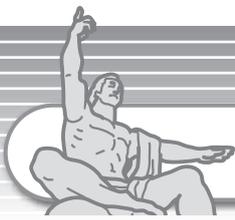
⑩原子爆弾落下中心地。原子爆弾投下により犠牲となられた方々のご冥福を祈るため、みんなで黙とうを捧げました。



⑪原爆資料館内のピーススペース。木村君と田中君による、原子爆弾による被害の実相を伝える紙芝居の朗読です。



⑫青少年ピースフォーラム1日目。小峰秀孝さんによる講話を聴き、原子爆弾による被害が被爆者の人生に大きな影響を与えたことを知りました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ②



⑬ピースボランティアの皆さんの案内により、会場である平和会館周辺の祈念碑などを巡るフィールドワークを行いました。



⑭青少年ピースフォーラム交流会では、全国から集まった仲間たちと食事を囲みながら交流を深めました。



⑮3日目。8月9日。平和祈念式典に参列しました。本会場の平和公園では、10名の団員が参列しました。



⑯中継会場の原爆資料館ホールでは、19名の団員が参列しました。詩の朗読やハンドベルの演奏を聴きました。



⑰平和祈念式典の後、平和祈念像を見学しました。世界の平和を祈るその雄大な姿から、平和の尊さや大切さを感じました。



⑱青少年ピースフォーラム2日目。班ごとに分かれて、戦争が起こる原因とその解決策について意見を出し合いました。



⑱戦争の原因と解決策について、班としての意見をまとめました。それをパズルのピースに書き込み、発表しました。



⑳パズルのピースを組み合わせると、大きな鳩のハートが完成しました。最後に、参加者全員で記念撮影を行いました。



㉑世界文化遺産に登録された大浦天主堂と、旧グラバー住宅があるグラバー園を見学しました。長崎の歴史と文化に触れました。



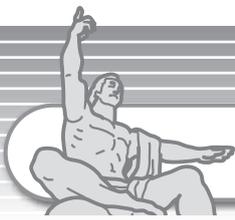
㉒3日目のミーティング。青少年ピースフォーラムの修了証が、寄金団長から一人ひとりに手渡されました。みんな立派なピースコミュニケーターです。



㉓岡部先生にアドバイスをいただきながら、報告会で発表する内容について班ごとに話し合い、役割分担を決めました。



㉔4日目。表門橋を渡り、江戸時代に日本の貿易の窓口となった出島を見学しました。ヨーロッパとの貿易の歴史に触れました。



写真で綴る長崎派遣研修風景 ③



⑳郡山に到着し、市役所で解散式を行いました。団員代表の長谷川さんが、4日間の研修で学んだこと、これから伝えていきたいことを述べました。



㉑4日間の派遣研修が終わりました。仲良くなった仲間たちとの研修最後の写真撮影です。



㉒1班団員（左から） 降矢優之介、青山怜平、村越透斗、鈴木拓紀、濱津優子、高橋萌乃、橘内祐奈、大内怜奈（班長）



㉓2班団員（左から） 小山美樹、長谷川珠姫、伊藤楓愛、橋本早知子、田中直太朗（班長）、増子知希、須釜陽斗

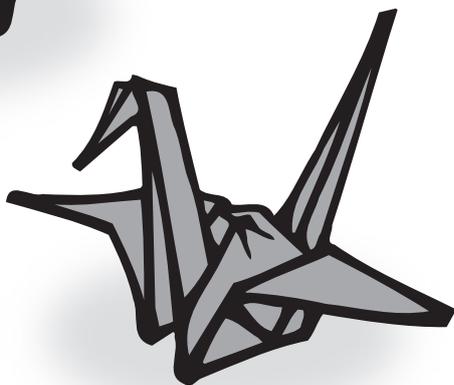
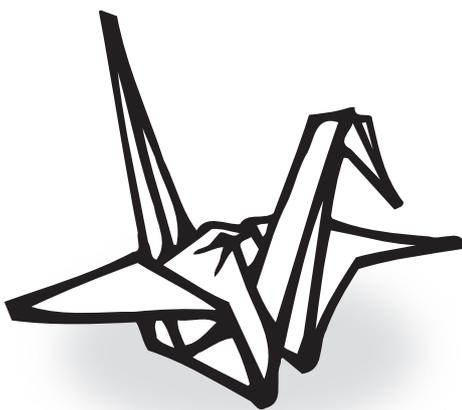


㉔3班団員（左から） 小林瑚雪、横山彩華、高橋優芽、大竹統也、佐藤紘夢、米本響（班長）、鈴木英一郎



㉕4班団員（左から） 木村拓真、横田大晃、関根拓海、熊田桃子、三浦あゆ奈、杉原礼菜（班長）、橋本茅乃

§ 團 員 報 告 §



平和とは何だろう



郡山市立日和田中学校2年 青山 怜平

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日、午前11時2分。プルトニウムという成分を用いた一発の原爆「ファットマン」が投下された。落とされた瞬間、まばゆい光と共にたくさんの人が亡くなった。生き残った人たちも、白血病などの病に侵された人が多くいた。

以前、僕が図書室で偶然見つけた本には、このような記述があった。この事実を知り、僕は怒りがこみ上げてきた。なぜこんなことが起きてしまったのか。そこに至るまでの日本の歴史や過去について詳しく知りたいという思いから、研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館に入った時、左側に目を向けると、目に飛び込んできたのがたくさんの折り鶴だった。下に降りていくと、そこだけ空気が違うように感じた。空気がよどんでいるようで、息苦しくなった。異様な雰囲気強く感じた。原爆「ファットマン」の模型や、原爆の熱で溶けた瓶、お金、瓦などがたくさんあった。また、被爆した人たちの写真が展示されており、それを見た僕は衝撃を覚えた。原爆の恐ろしさを改めて知った。

(2) 永井隆記念館

医師であった永井隆博士。しかし、原爆の影響で博士も被爆してしまった。それにもかかわらず、白血病になりながらも、原爆による負傷者の手当てを行った。

何度も何度も意識を失いながらも、救護活動を行った永井博士。しかし、白血病の影響で寝たきりになってしまう。病床にありながらも彼

は本を書くことにした。彼はこう話す。「腕と体と頭があれば本が書けるじゃないか」と。永井博士は、どんな時でも前向きに生きようとしていた。彼のポジティブな考え方は多くの人を元気づけた。「平和」とは、自分の近くにいる人を笑顔にすることから始まるのだと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたる青少年ピースフォーラムでは、沖縄県をはじめ、他県の方々と共に平和について意見を出し合った。

1日目は、被爆された方の体験談を聴き、原爆投下の様子をまとめた紙芝居を見せていただいた。原爆というのは、一瞬にしてすべてを破壊し、人の命を容赦なく奪ってしまうことを知った。

2日目は、今の「平和」について考え、多くの人と話し合った。今なお、世界中には14,900発もの核兵器が存在すると聞き、驚いた。あれほどの犠牲がありながらも、世界は本当の平和からはほど遠いのだ。平和の実現には、一人ひとりが平和を願い続けていくことが大事なのだと感じた。



< 平和祈念像 >

3 心に残ったこと

僕が一番心に残ったのは「平和祈念像」だ。この像は、原爆投下の10年後に完成した。

右手を空に上げるのは「原爆の脅威」、左手の水平は「平和」を表している。曲げた右脚は「原爆投下後の長崎市の静けさ」、立てた左脚は「救った命」。そして、軽く閉じた目は「戦争犠牲者の冥福を祈る」という意味が込められている。

この像からは平和の尊さが感じられた。また、長崎の人々の平和への強い願いが、「長崎で起きた悲劇を二度とくり返してはいけない」という思いが、伝わってくる。

「平和祈念像」は、これからも平和への祈りを捧げながら、人々を見守ってくれるだろう。

多くの国の人々がこの像の前で手を合わせ祈る姿を見ることができた。世界の誰もが平和を願っている。僕も「平和な暮らしが世界中の人たちに広まりますように。」と祈りを捧げた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の研修で学んだことや共に過ごした仲間との出会いは、とても貴重な体験となった。今回の研修では、改めて平和の大切さ、戦争や原爆の恐ろしさについて知ることができた。更に、今まであまり知らなかった長崎の歴史や文化に触れることもできた。現在の長崎は明るい街で、「原爆が投下された」ということは全く感じられない。当時の様子を知るほど、被災した長崎の人々の努力や苦勞がいかに大変だったかを思い知らされた。

戦争は二度とくり返してはいけないと僕は思う。しかし、いつ危険が迫ってくるか分からない。僕たちができることは何か。それは、戦争を許さない強い気持ちを持つことだと思う。平和を望む声を上げることだと思う。今回の研修で学んだことをこれから未来に役立てていき、多くの人に平和の尊さを伝えていきたいと思う。

長崎を最後の被爆地に！



郡山市立行健中学校2年 長谷川 珠 姫

1 派遣研修への参加に当たって

夏休みに中学2年生を対象とした長崎派遣事業があることを中学校の先生から伺った時、「あ、これは原爆について知ることができるチャンスだ。」と思った。昨年夏、チェルノブイリ原発事故の影響下にあるベラルーシ共和国を訪れ、原子力の負の側面について学ぶ機会があったが、今夏はもう一つの負の側面である“原爆”について知りたい、テレビ中継でしか観たことがなかった長崎平和祈念式典に臨みたい、今の長崎の“8月”を自分自身の目で耳で肌で体感したいと思い、今回の派遣事業に参加した。

2 派遣研修に参加して

世界遺産にも登録された歴史ある教会群、緑がきらきら光る街路樹、港から広がる青い海…。

73年前の長崎にも、きっと私が見たのと同じように美しくまばゆい景色が広がっていたのだろう。初めは「本当にこの街に原爆が投下されたのだろうか。」と疑いたくなるぐらいであったが、長崎滞在中の様々な体験を通して、街中の至る所や人々の心身に未だに消えない爪痕が残されていることを知った。同時に、「同じ過ちを繰り返してはならない。」という長崎の人々の強い決意も感じる事ができた。

(1) 平和祈念式典

暑かった。とにかく暑い中で式典は行われた。73年前の8月9日もきっと暑かったことであろう。仮設テントに取り付けられたスプリンクラーから細かいミストが噴射される中、式典は厳かに進められた。初めに、被爆された方々による合唱“もう二度と”があった。「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」というフレーズが私の心に響いた。長崎の鐘が鳴り響く

中、午前11時2分の原爆投下時刻に合わせての黙祷。1分間目を閉じながら、私の瞼の奥には、熱風によって焼けただれた人々が「水を、水を。」とさまよう姿がありありと浮かんできた。式典の中でも特に印象に残った“献水”というセレモニーでは、原爆で亡くなった方々に水が手向けられた。「あんなに求めている水がどうか人々に届きますように。そして歌声に乗せて祈りの心も届きますように。もう二度とこんな悲しいことが起きませんように。」という思いで心がいっぱいになった式典だった。

(2) 青少年ピースフォーラム

北は北海道、南は沖縄県から集まった中学生たちと「戦争はなぜ起こったのか。」というテーマについて意見交換を行った青少年ピースフォーラム。戦争が起こる原因として、「食料や土地を奪うため」、「自己中心的な考えを持つ人々が多いため」等の様々な意見が交わされ、戦争を回避するためにはどうしたらよいか、また、自分には何ができるのかということについて考えを出し合った。

フォーラムの最中、現代の原爆の威力を音で感じ取るという試みで「パパパン」という爆音が鳴り響いたとき、会場にいた参加者たちが息を呑む場面があった。私も音の威力のすさまじさに背筋が凍る思いがした。とにかく怖かった。音からも原爆の恐ろしさを改めて認識することができた。

(3) 感銘を受けた永井隆博士の言葉<抜粋>

「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオッド！平和は長崎から！」



< あの瞬間(とき)のまま… >

3 心に残ったこと

この写真は、11時2分の原爆投下時刻を指したまま止まってしまった柱時計の写真である。この柱時計は原爆資料館の中に展示され、訪れる人々に無言のメッセージを送り続けている。

1945年8月9日午前11時2分、長崎に投下された「ファットマン」は、プルトニウムの核分裂作用を利用した猛烈な原子爆弾だった。プルトニウムの大きさは直径8センチ、重さは2キロ。たったこれだけの大きさで7万人もの命を一瞬にして奪ってしまったそうである。

この柱時計は、爆心地から800メートルほど離れた民家にあったものであり、長崎の街が同時刻に一瞬にして破壊され、多くの命が犠牲になるほど、ファットマンの破壊力がすさまじかったことを物語っている。

永遠に時を刻むことのない止まった柱時計の前に立ち、まるで当時の長崎にタイムスリップしてしまうかのような不思議な感覚に襲われた。

今回の長崎派遣では、様々な原爆に関連する場所を訪れ、心を揺さぶられる場面にも多く遭遇した。また、現在の美しい街並みや古き良き時代を感じる名所・名跡も訪れることができ、写真もたくさん撮ったが、止まってしまった柱時計が一番印象深かったため、この写真を選んだ。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の長崎派遣を終えて郡山市役所前に私たちの乗ったバスが到着したとき、開成山公園から賑やかで軽快な音楽とともにMCの声が大音量で響いてきた。「そうか、BCリーグか(笑)。」普段だったら、「あ〜うるさいなあ。もう。」と思うところだが、長崎で原爆や戦争の悲惨さについて多くのことを見て聴いて確かめた後だったからだろうか、大音量の音楽や声に、私たちが暮らす今が平和であることを実感せずにはいられなかった。イベントが楽しそうに開催されていること、三度の食事を食べ、学校へ通い、剣道部で友達と竹刀を合わせたり、笑い合ったり、ふざけ合ったり。そんな当たり前の日常があるのは、今、私たちが暮らす世の中が平和であるからに他ならない。当たり前だと思っていたことが本当はなんと尊いことであろう。長崎での4日間を終え、私はそのことに気づくことができた。

楽しいイベントが開催されるということは、世の中にゆとりがあり、平和であることの証であると思う。私たちが大人になったときにも、みんなが楽しくイベントを開催し、参加できるような世の中であって欲しいし、私たちの子や孫やそのまた次の世代までも平和が続いて行って欲しい。そう願うだけではなく、今回私が学び考えたことを少しずつでも周囲に伝えていけたらと思う。

長崎を最後の被爆地にするためにも。

平和な世界を作るために



郡山市立明健中学校2年 橋本 早知子

1 派遣研修への参加に当たって

長崎といえば、何を思い浮かべるだろうか。カステラ、ちゃんぽん、皿うどんなどの料理や、出島やハウステンボスなどの観光地を思い浮かべる人もいると思う。しかし、絶対に忘れてはならないのは、「長崎に原子爆弾が投下された」ということである。

私は、今から73年前の1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されたことは知っていたが、その規模や当時の様子など詳しいことは分からなかった。そのため、長崎についてもっとよく知り、学んだことをもっとたくさんの人に知ってもらいたいと思い、この研修に参加することを決めた。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、原子爆弾に関する資料や、被爆後の様子が展示されていた。原子爆弾が投下された11時2分で止まった柱時計、熱線によって溶けたビン、中身が黒焦げになった弁当箱など、原子爆弾の恐ろしさを物語るものばかりが並んでいた。中でも、被爆直後の長崎の様子を写した写真がとても印象に残った。瓦礫が散乱する地面に「人の形をした黒いもの」がたくさん転がっている風景を写した写真もあり、鳥肌が立った。たった一発の原子爆弾によって人間はこんな風になってしまうのか、と恐怖を感じたからだと思う。

また、そのような資料の他にも、各地から贈られた折り鶴や、平和を表した作品が至る所に飾られていて、たくさんの人たちの平和への思いが伝わってきた。この施設は長崎の人々にとってなくてはならないのだと感じた。

(2) 平和祈念式典

8月9日に行われた平和祈念式典に、私は長崎原爆資料館ホールにて参列した。初めに、被爆者の方々の合唱を聴いた。そして、午前11時2分。原子爆弾が投下された時刻ちょうどに、平和の鐘が鳴る中、黙祷をした。死没者の方々が安らかに眠ることができるように、この悲劇をもう二度と繰り返さないようにと祈った。その後、長崎市長の平和宣言や、国連事務総長の挨拶があった。この日をきっかけに、きっとたくさんの方が平和について考えただろう。

(3) 青少年ピースフォーラム

平和会館ホールで8日、9日の2日間行われた青少年ピースフォーラムでは、ピースボランティアや、他県の人たちと意見交換をして、さらに自分の意見を深めることができた。

グループの中で、戦争の原因とその解決策について話し合った。今まで、「戦争に巻き込まれた側」のことばかり考えていて、「戦争を起す側」の気持ちになって考えたことはなかった。この活動の中で自分以外の人々の意見を聴くことで、新しい意見が出たり、別の視点から考えられたりした。

最後に、班ごとにまとめた意見を一枚の大きな絵にした。ばらばらでは何を描いてあるのかわからなかったのだが、一つにまとめると、鳥がハートを形づくっている絵が現れた。この絵から、一人ではできないようなことでも、同じ思いを持つ人が集まれば、大きなことを成し遂げられるのではないか、と感じた。



< 原子爆弾“ファットマン” >

3 心に残ったこと

これは、原爆資料館のプルトニウム型原子爆弾「ファットマン」の実物大の模型だ。背は私の2倍ほどもあるのに、その核はソフトボールと同じくらいの大きさだという。そのときは、私たちの手の平に載るくらいのもので、死傷者を15万人も生んだ悲劇をもたらしたなんて、想像もできなかった。だが、もっと人が密集していたところにこの原子爆弾が投下されていたら、さらに死傷者の数が膨らんでいたかもしれない。そんなたくさんの人の命を奪うような核兵器の保有を、私たちは「国を、自分たちの命を守るため」という理由で、許してしまってもいいのだろうか。

4 派遣研修に参加して感じたこと

やはり、原子爆弾の恐ろしさは体験した人でないと分からないと思う。それに、私たちの年代は、原子爆弾について知らない人がほとんどだ。その中でも、私たちのように実際に長崎を訪れ、原子爆弾について学んだり、被爆者の方の講話を聴いたりした、という人はごくわずかだ。さらに追い打ちをかけるように、被爆者の平均年齢は80歳を超えている。だからこそ、私たちが核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを伝えていかなければならない。たくさんの人に伝えるのは難しいかもしれないけれど、まずは自分の手の届くところから始めていきたいと思う。私たちにできるのは、より多くの人に原子爆弾と戦争について知ってもらうことなのではないだろうか。

見慣れた平和



郡山市立安積中学校2年 大竹 統也

1 派遣研修への参加に当たって

私はこの派遣事業に当たって、まず長崎とはどのような県なのかを考えた。思いつくものはカステラ、ちゃんぽんや皿うどんなどの食べ物や、出島や島原の乱・天草四郎・隠れキリシタンなどの歴史に関することだ。その中でも絶対に忘れてはいけないことが原爆だ。私達の住む福島県も、7年前の原発事故により多くの被害を受けた。そんな私達だからこそ、この長崎派遣事業に是非参加したいと思ったのが動機だ。

2 派遣研修に参加して

長崎には現在、73年前多くの人々の命を奪った核兵器による被害の面影はなく、活気のあるきれいな街だった。

(1) 平和公園・原爆資料館

平和公園では、当時の周辺の様子や公園内の銅像の説明をしていただいた。当時は刑務所があり、全員が亡くなったそうだ。

原爆資料館では、11時2分そのまま動かなくなった時計や人体への被害の様子など、生々しい資料が展示されていた。その中でも気になったのが、熱線による被害だ。原爆投下時、爆心地では熱線が3,000～4,000℃にもなったと言われているのに、遺品などが形として残っていたからだ。「そこまで高温なのであれば一瞬のうちに溶けてしまうはずなのに…」と思ったが、原爆は熱伝導率が速すぎるが為に溶けずにこのような被害になったと知った。

このような悲惨な事実を聴き少し気分が沈んでいた時、目に飛び込んできたものがあった。それは「鶴」の絵だ。額縁の中に折り鶴で「NO MORE WAR」と書かれ、原爆とは無縁とも思える美しいものだった。この絵を見た時、心

の底から「核兵器は悲惨な物で二度と使ってはならない」という思いを強く持った。

(2) 青少年ピースフォーラム

2日間行われた青少年ピースフォーラムでは、被爆の実態を聴いたり、多くの人と話し合ったりする場が設けられた。

1日目は、被爆者である小峰秀孝さんの原爆のお話だった。

被爆後の人生は、普通の人間とは見てももらえず、差別といじめの繰り返しだと語ってくださった。心許ない言葉をかけられたため、被爆者の自殺が後を絶たず、自身も「死にたい」と考えたこともあると語ってくださった。秀孝さんは、今の若者に自分と同じ道を歩んで欲しくないため、「語り部」として多くの人へ核兵器の怖さや不要さを伝えてくださっている。

2日目は、「なぜ戦争が起こるのか」、「どうすれば解決できるのか」を話し合った。私は、話し合いの後、時代の流れの中で刻々と状況が変わる中、その最善策をいかに講じていくか、見えてこない将来のリスクにどう備えるかを考える必要があると強く思った。

(3) 平和祈念式典

私は、初めて平和祈念式典へ参列した。式典には世界から多くの人が集まり、平和を願った。そして午前11時2分…。追悼の中で、73年前の今、多くの人亡くなっていると思うと心が痛くなった。もう核兵器はいらないと心から思い、亡くなった人達を追悼した。

3 心に残ったこと

私が一番心に残ったことは、如己堂で見た永井隆博士の言葉だ。その言葉の中で特に心に残った言葉が二つある。



< 如己堂 >

一つは、「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか？…私達だ。おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ。」という言葉だ。私は、この言葉は、原爆により「灰の丘」になった長崎の写真を見て私が最初に感じたことと同じであると思った。戦争を引き起こさなければ、活気であふれたかつての長崎が「灰の丘」になることはなかったのではないか。そして、それを引き起こしたのは紛れもなく私達人間だ。

もう一つは、「平和を祈るものは、一本の針をも隠し持っているはならぬ。自分が…たとい、のっぴきならぬ破目に追い込まれたときの自衛のためにあるにしても…武器をもっている、もう平和を祈る資格はない。」という言葉だ。この言葉には、永井博士の平和への考え方が込められていると感じた。この世界は人と人との関わりで出来ている。しかし、実際の武器は勿論、心に武器を持ったままでは、相手と平和な関係を築くことは難しいと思う。相手が武器を持っていた時に、自分は相手を信じられるだろうか。

相手の立場に立ち信頼を得るためには、相手を自分の鏡の如く、自分をさらけ出して接しなければ平和な関係は築けないという考えではな

いだろうか。

永井博士は、こうした考えで救護活動に当たり、自宅に「如己堂」と言う名前を付けたのではないかと考えた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回、この派遣事業に参加し、原爆の悲惨さや非人道さを学んだ。原爆資料館で原爆の人体への被害の大きさを学び、今では少なくなってきた被爆者の貴重なお話を聴く機会もあり、非常に充実した時間を過ごすことが出来た。またそれだけではなく、普段関わることの出来ない、県内外の同年代の人との話し合いを行い、様々な意見の交換をすることが出来たことも大きな財産となった。

今、私達の前にある景色は、生まれた時から当たり前のように見てきたものだ。もし、その景色が一瞬にして変わってしまったら？そんな考えも出来ないことが73年前に実際に起こっていた。

今ある平和を大切に、周りへ伝えていくことが、今の私達にできる最大限のことだと感じた。平和な未来を築くことは難しいことではあるが、不可能なことではない。それが未来を創る私達自身のテーマではないだろうか。

伝え続ける平和の願い



郡山市立安積第二中学校2年 杉原礼菜

1 派遣研修への参加に当たって

戦争や原子爆弾のことは、本を読んだり話を聴いたりして、知識としてあったつもりでいたけれど、被害の大変さをイメージすることが難しかった。

実際に被爆地の長崎市を訪れ、原子爆弾の実相を自分自身で感じ、平和について学び、戦争の悲惨さを人々に伝えることが戦争を体験していない私たちにできることだと考え、今回の派遣研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

隣人愛による恒久平和を訴え、願い続けた永井隆博士。43歳という若さで亡くなった永井隆博士の生きた証が展示してあった。

永井隆博士は、放射線物理療法の研究をしていた。しかし放射線を浴び続けたことで白血病を患い、余命3年と宣告された。長崎に原子爆弾が投下されたときは、自分自身も被爆し頭に大けがを負ったが、負傷者の救護にあたった。そして、仲間たちの厚意によって博士のための新しい住まいが建てられた。それが「如己堂」だ。博士は、聖書の一節の「己の如く人を愛せよ」という言葉から「如己堂」と命名したのであった。

永井隆博士のように命を懸けて人のために尽くすことは、言うことは簡単だ。けれども、行動にするのは難しい。私にはできないと思う。私は、永井隆博士について学び、日々まわりの家族や友達を大切に生きていこうと思った。

(2) 平和祈念式典（原爆資料館ホール）

私は平和祈念式典で、長崎市長の「長崎平和宣言」、被爆者の方の「平和への誓い」を聴いて、改めて戦争は絶対にしてはいけないと思った。

私は、被爆者の方の「同じ苦しみを世界の誰にも味わわせてはならない」という言葉、そして、「もう二度と」という歌の「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞がとても心に残っている。なぜなら、被爆者の方の永久平和と核兵器廃絶への強い想いが伝わってきたからだ。その想いがあったから日本は、戦後凄まじい復興を遂げたのだと思った。

平和と核兵器廃絶への想いは、被爆者の方だけではなくて、唯一の被爆国の日本全体で世界に発信していくべきだと、式典に参列して強く思った。

(3) 平和公園

平和公園には平和祈念像、平和の泉、そして各国から贈られた平和を願って造られたモニュメントがあった。

原子爆弾によって亡くなった人々は、水を求めながら亡くなっていった。水を捧げてめい福を祈るために造られたのが「平和の泉」だ。噴水の形は、平和の象徴である鳩がイメージされたものだった。

各国から贈られたモニュメントの中で一番印象に残っているのは、ニュージーランドから贈られた「平和のマント」だ。マントは、平和な世界に身をゆだねる人々の一体感と、それを包み守るものを象徴している。このマントから人々の平和への想いを感じた。各国のモニュメントを見て、平和に対する想いはどの国でも同じだと感じた。



< 長崎に投下されたファットマン >

3 心に残ったこと

この写真は、長崎に投下された原子爆弾の模型である。そのふっくらとした形から、「ファットマン」と呼ばれたのだが、この原子爆弾が長崎市を一瞬にして焼け野原にした。実際の「ファットマン」は大きかったが、核物質の大きさは、野球ボールぐらいだと知った。私は、野球ボールぐらいの核物質がこんなに大きな被害を及ぼすと知って、核兵器の恐ろしさを感じた。主なエネルギーの爆風、熱線、放射線によって多くの人々を死に至らしめた。生き残った人たちも、放射線によって白血病やガンになり、原子爆弾によって体にも心にも傷を負った。私は、同じ人間なのに人を一瞬にして傷つける恐ろしい核兵器を作ってしまったのかと、この模型を見て思った。

今、世界には1万5千発以上もの核弾頭がある。長崎に投下された原子爆弾よりも強い威力の核弾頭が使用されたらと考えるだけで、とても恐ろしい。核兵器の恐ろしさは、唯一の被爆国、日本が一番知っている。だから、私たち日本人が核兵器の恐ろしさを伝え、地道に核兵器廃絶を訴えることはとても大切だと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の研修で、原子爆弾の悲惨さ、命の尊さ、平和な世の中の在り方を学んだ。そして、長崎は、73年前焼け野原だったとは思えないほど緑豊かな美しい街だった。ここまで復興したのも人々の努力と平和への想いの表われだと私は感じた。

私たちは世界で唯一の被爆国の国民として、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを、世界中に、そして後世に伝えていかなければならない。また、被爆者の方から聴いたお話や「もう二度と被爆者を作らないで」という想いを周りに伝えていくことは、戦争や原子爆弾を経験していない私たちが今すぐにでもできることであり、なくてはいけないことだと思った。

私は、今の世の中が平和だと思っていた。確かに今は平和だが、本当の平和とは地球上に核兵器が一発もない世の中のことでないかと思った。私たちが「戦争をやめよう！」「核兵器をなくそう！」と声をあげなければならない。

私たちが平和への想いを伝え続けることで、いつか本当の平和な世の中で暮らせることを信じて、これからたくさんの人に平和への想いを伝えていきたい。

平和への願い



郡山市立三穂田中学校2年 佐藤 紘 夢

1 派遣研修への参加に当たって

日本は、唯一の核爆弾被爆国である。1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されたということは知っていた。しかし、落とされた原子爆弾による長崎の被害の詳細は知らなかった。そのため、長崎で起きたことについてより深く知りたいと思い、この研修に参加することに決めた。

2 派遣研修に参加して

初めて訪れた長崎には青い海やきれいな山、活気にあふれた街並みがあった。原爆の被害に遭ったとは思えなかった。

(1) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆の凄まじさが分かる約1,500もの資料が展示されていた。長崎の街が一瞬にして破壊されたことを物語る11時2分を指して止まった時計、熱線により溶けた6本の瓶、高熱により溶けたガラスが手にくっついているもの、熱線により皮膚が焼けただれて肉や骨までもが露出した人の写真などがあった。この原子爆弾により7万人が亡くなり、7万5千人が負傷したことにとっても驚いた。

その中に「ファットマン」という原子爆弾の模型があった。予想よりも小さく、全長3.6メートル、重さ4.6トンのプルトニウム爆弾だった。このファットマンにより、多くの命が一瞬にして奪われたと思うと恐怖を覚え、胸が締め付けられた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、全国の小学生・中学生・高校生と平和について学習した。

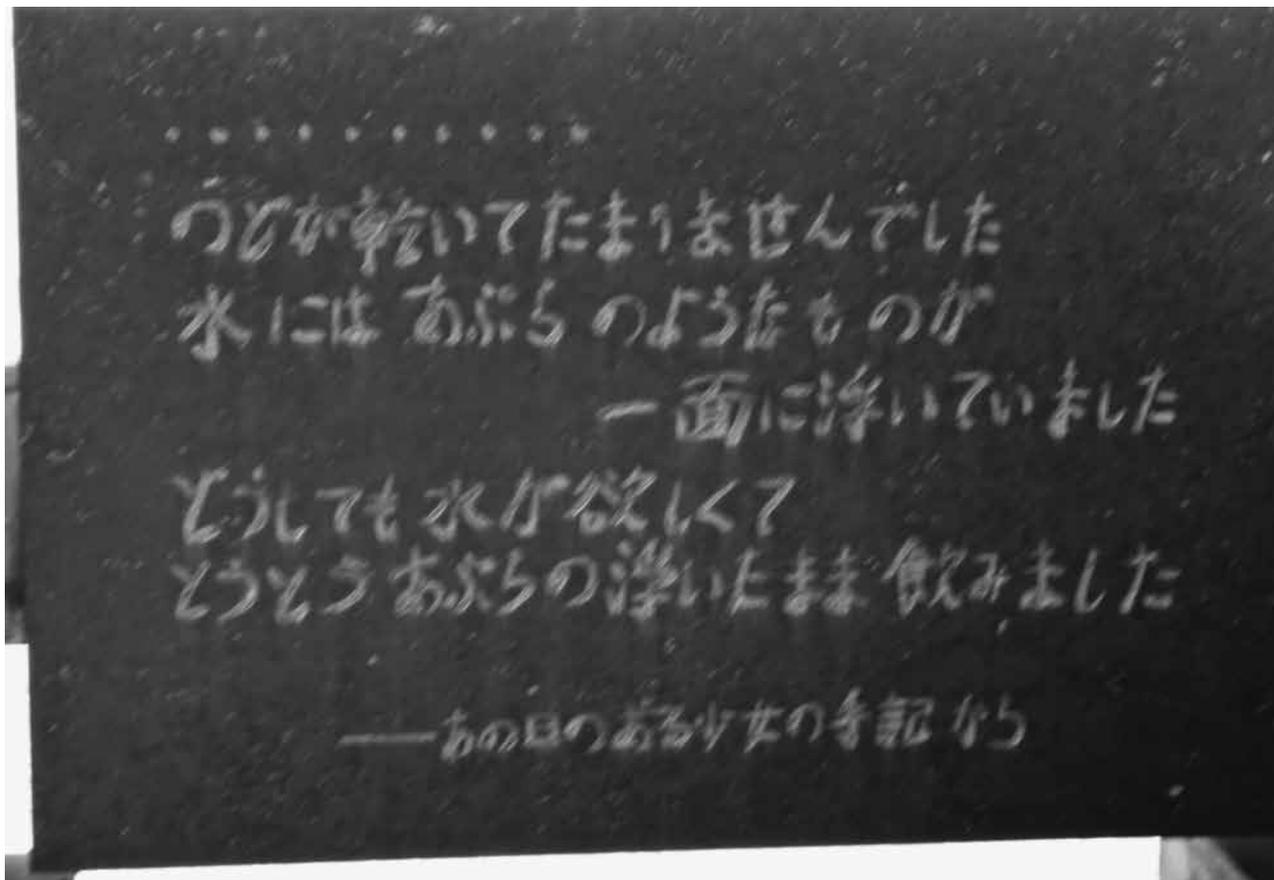
この中で、被爆した小峰秀孝さんの講話があった。それは、被爆者のその後の人生につい

てだった。一番印象に残ったのは、小学生だった小峰さんが原爆の後遺症のためにいじめに遭い、「アメリカが憎い」とお母さんに言った時、返ってきた言葉が「原爆を憎め」という言葉だった、という話だ。原爆さえなければ、多くの人を苦しめることは無かったのだろうと思った。

(3) 如己堂・永井隆記念館

如己堂・永井隆記念館では、43歳という若さで亡くなった永井隆博士の生きた証が展示されていた。永井博士は、長崎医科大学病院で被爆し大けがを負ったが、我が身もかえりみず、生き残った医師や看護婦、技師とともに、家族の消息もたずねないまま、何度も意識を失いながら救護活動を行った。戦争が終わると、如己堂というたたみ2畳ほどの小さな家に住んだ。ここで、寝たまま原爆による病気の研究をしたり、「長崎の鐘」や「この子を残して」などの本を書いたりして、原子爆弾の恐ろしさや戦争の愚かさ、「いのち」と「平和」の大切さを訴えた。それは、実際に自分が被爆したからこそ「二度とあってはならない」という思いが強かったからだと思う。

永井博士のように、他人のために自分の命を懸けるような事は私にはできないと思った。でも、原爆による被害や、平和の大切さは伝えていこうと思った。



< 平和の泉の石碑 >

3 心に残ったこと

心に残ったことは、平和公園にある平和の泉の正面にある、9歳の少女の手記が刻まれた石碑である。「のどが乾いてたまりませんでした

水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と刻まれていた。

原爆により体内まで焼けただれた被爆者は、水を求めさまよい、うめき、叫びながら亡くなったそうだ。この平和の泉は、そうして亡くなった痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、平和を祈念して造られたそうだ。どんなに苦しく辛かったことか、想像もできないほどだ。

私は、平和であることが当たり前のように生活していたが、決して当たり前ではなく、平和であることに感謝しなければならないと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この長崎派遣に参加して、たった1発の原子爆弾でたくさんの尊い命が奪われ、生き残った人にも重い後遺症が残ったことを知ることができた。実際に被爆者の講話を聴いたり、原爆による被害の惨状を見たりして、戦争の恐ろしさをより深く学んだ。

この世に核兵器があってはならないと思う。現在、世界には核弾頭が1万5千発近くあるそうだ。しかし、核兵器を持っている国は、他の国に知られないようにしており、核兵器の実態は正確にはわからないそうだ。威力がある核兵器を持つことで、自分の国の安全を確保しようとしているが、この間違った考え方を正し、平和のためにも核兵器を廃絶することが最も大切だと思った。

唯一の被爆国である日本は、広島・長崎であった現実を決して忘れてはならないと思った。同じことが二度と繰り返されないよう、私たちの世代が戦争の悲惨さを十分に認識し、平和を守り続けなければならないと強く感じた。

平和への思い



郡山市立逢瀬中学校2年 三 浦 あゆ奈

1 派遣研修への参加に当たって

「助けて！」

がれきの下に取り残され、血だらけの手を必死に伸ばし助けを求める子どもの絵一。

私が小学生の頃に見たドキュメンタリー番組で、一番深く印象的だった場面だ。「核兵器一発で多くの人が亡くなり、未来を消し去ってしまったんだ」と思い、戦争の残酷さが伝わってきた。

今、この日本では平和と感じる人が多いだろう。だが、世界に目を向けてみるとどうだろう。発展途上国では、各地で起こる戦争や紛争によって住む場所を失い、職も失い、貧しくなる人もたくさんいる。そして、当然亡くなってしまう人もいる。なぜ何の罪もない人が苦しまなければならないのかと胸が痛くなる。

これらのことから、私は、様々な人々が考える「平和への思い」を感じてきたいと思い、この事業への参加を決意した。この事業を通して、普段何気なく感じている「平和」について自分なりの考えを深めたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 平和公園、原爆資料館

平和公園はとてもきれいで、「本当にこの辺りが爆心地だったのか」と自分の目を疑った。平和公園の象徴である平和祈念像は、体長が9.8メートル、重さが30トンあり、北村西望さんが制作した。横に伸ばした左手は平和を、空に向かって指さした右手は原爆の脅威を、終戦地を見つめる瞳は犠牲者への冥福を意味しているという。30トンはかなり重かったが、それはまるで平和の重さを表しているように感じた。

原爆資料館で一番印象に残ったのが、「ファットマン」と呼ばれるプルトニウム爆弾だ。プル

トニウムは8センチほどの長さで、重さが6.2キログラム。こんなに小さな物体が、一瞬にして街を焼け野原にしてしまうとは…。そう考えると原爆の威力は甚大であり、胸が痛くなった。

(2) 青少年ピースフォーラム

被爆者の小峰秀孝さんのお話を聴くことができた。小峰さんは4歳の頃被爆し、その後の生活で「被爆者だから」という理由によって辛い体験をしてこられたという。想像を絶する話に、私も当時の悲惨な様子が目に浮かぶように感じられ、なぜ罪のない人がこんなに苦しむのだろうと思った。

小峰さんのお話の中で心に残ったのは「人間が作ったものは人間が壊すことができる」という言葉だ。核兵器も人間が作り出したものだから、人間がそれをなくすることもできるはずである。一刻も早い核兵器の廃絶を心の底から望んでいる。

(3) 平和祈念式典

今までもテレビで平和祈念式典を見たことはあったが、今回実際に参列して、平和を願う人々の思いの強さを改めて感じる事ができた。

まずは被爆者のみなさんの合唱が感動的だった。どの歌詞にも平和を希求する強い思いが込められていて、心を打たれた。また午前11時2分には、参列者全員で原爆で亡くなった方たちに黙祷を捧げた。厳かな雰囲気の中で、私も「もう二度と戦争を起こさないでほしい」と心から願った。そして、長崎の鐘が鳴り響くと同時にたくさんの鳩が空に飛び立った様子は、私にはまるで平和を世界に届けに行くように見えた。平和を希求する長崎の人々の強い思いが、世界中の人の心にも届くことをこれからも願っていきたいと思った。



< 平和への思いが込められた泉 >

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園内にある平和の泉であり、原爆で体が焼けただけ、水を求めながら亡くなった被爆者の霊に水を捧げて冥福を祈るとともに、世界の平和が永久に続くことを祈念し建設されたそうだ。特に私が印象に残ったものは、この泉のそばに立てられた石碑の中の、ある少女の手記だ。

のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました

この手記から、被爆者があぶらが浮いた水でも飲んでしまうほど精神的に追い込まれていたことや、水が飲めずに亡くなった方の無念さ、原爆投下後の生き地獄のような光景を想像すると、私は、原爆の悲惨さや壮絶さが伝わってきて胸が締め付けられるようだった。改めて、戦争による悲劇を繰り返してはならないことや、今ある平和が多くの尊い命の犠牲の上に成り立っており、この平和を続けていくことが、今を生きている私たちの使命なのではないかと感じた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

この派遣事業に参加して、様々な思いを抱くことができた。一つ目は「もう二度と戦争を起こしてはいけない」ということだ。被爆者のお話を聴き、今でも心の傷が癒えていないことがわかった。二つ目は「今ある日常の大切さ」だ。原爆資料館で黒焦げの弁当箱を見たとき、原爆がそれまであった日常を一瞬にして消し去ったことを思うと、何気ない日常がとても幸せなことだと感じた。三つ目は「平和への熱い気持ち」だ。平和祈念式典で行われたセレモニー一つひとつに世界平和を希求する思いが込められており、この思いをいろいろな人に伝えていきたいと思った。

これらのことから、私は、「平和」とは「互いの考えや立場を尊重すること」であると考え。戦争は、互いの考えを受け入れず、自分の都合を優先して行動した結果の最たるものである。互いの違いを認め合い、自分中心の考え方でなく相手のことを尊重し話し合うことが、平和につながる第一歩ではないだろうか。

戦後、多くの人々が逆境を乗り越え、平和な世の中を創ってくれた。今ある平和を今後も続けることがとても大切である。今私たちにできること、それはいろいろな人の考えを尊重し、互いに手を取り合い、すべての人が笑顔でいられるようにすることだと思う。

戦争のない世界へ



郡山市立片平中学校2年 村 越 透 斗

1 派遣研修への参加に当たって

僕は、8月6日と9日に、広島と長崎へ原子爆弾が投下された事実は知っていたが、原子爆弾投下によってどのくらいの人々が被害にあったのか、原子爆弾とはどのようなものなのか、などという詳しいことは知らなかった。毎年8月上旬になると、テレビなどでそのことについての特集などを見て、原子爆弾や被爆した広島と長崎のことについて分かったことはあったが、分からないことも多々あった。そこで、被爆地である長崎を訪れ、分からなかったこと、学校や地域のみなさんに伝えたいことなどを学びたいと思い、この「長崎派遣事業」に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

如己堂は、病に倒れた永井隆博士のために、1948年（昭和23年）3月、浦上のカトリック信者と近所の人の好意で建てられた二畳一間の小さな木造の家だ。「如己堂」の名は、「聖書」の一節「己の如く隣人を愛せよ」という言葉から名付けられた。

永井隆記念館には、永井隆博士が残した「原子爆弾は長崎でおしまい！長崎がピリオッド！」という言葉など、数々の名言が展示してあった。そのような名言を見て、平和を思い続けて生きていた永井隆博士の気持ちを、たくさんの人に伝えたいと思った。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、原子爆弾の恐ろしさが分かるものがたくさん展示されていた。11時2分で止まった時計や、原子爆弾の熱線によってぐにやぐにやに曲がったびんなどがあった。そして、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」

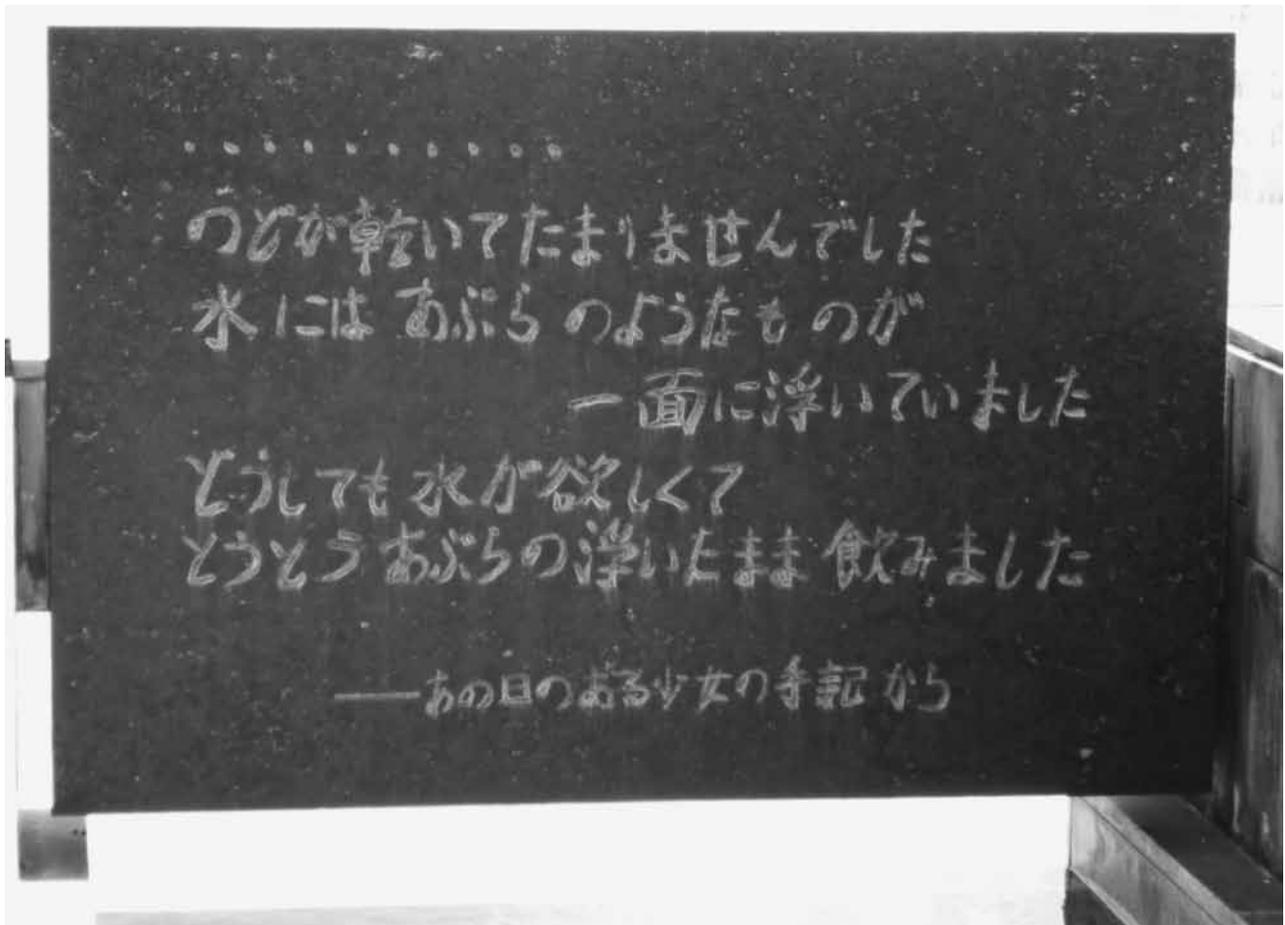
の模型が展示してあった。「ファットマン」は自分の想像を超える大きさだった。原子爆弾での死者73,884人、負傷者74,909人、被災戸数18,409戸。僕はこの数字を見て、一発の原子爆弾の投下でこんなに被害が出ていることに驚きを隠せなかった。

原子爆弾の恐ろしさを改めて知ることができた。世界で一つの被爆国、日本に住んでいる僕たちが、世界中にこのことを伝えなければならぬと強く思った。

(3) 平和祈念式典

8月9日の平和祈念式典に参列した。式典は、長崎市長の平和宣言や安倍総理などの来賓挨拶があった。式典の冒頭には、被爆者の合唱団「ひまわり」の方々の「もう二度と」の合唱があった。その歌の「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が強く印象に残り、被爆者たちの思いが伝わってきた。そして、午前11時2分、長崎の鐘が鳴る中、黙祷を捧げた。今もなお放射線の影響などで苦しむ被爆者を出した戦争や核兵器がない世界に、そして世界中が平和になることを願った。

被爆者の平均年齢は80歳を超えている。戦争、原子爆弾の恐ろしさを体験した人はだんだん少なくなっていく。未来の日本で生きる僕たちに伝えてくれたたくさんのことを、僕たちがたくさんの人に伝えていかなければいけないと思った。



< 平和の泉の石碑 >

3 心に残ったこと

上の写真は、平和公園にある「平和の泉」の石碑である。原爆によって被害を受けた人々は「水を、水を。」とうめき叫びながら亡くなっていったそうだ。その霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和を祈念するために「平和の泉」が造られた。

「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

これは、当時9歳だった子が体験したことだ。僕はこれを読むたびに心が苦しくなった。

今のこの時代は、食べ物、飲み物が当たり前のようにあるが、それは当たり前のことではないのだということを、この石碑を見て思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕は今回の研修で、戦争や原爆のことについて知らなかったことなどをたくさん学ぶことができた。

長崎に落とされたたった一発の原子爆弾が多くの命を奪い、現在も原子爆弾によって苦しみ続けている人がある。このようなことがもう二度と起きてはならないと思う。

原子爆弾の投下から73年。今でも戦争が世界では起きている。このままでは、また同じ悲劇が起こってしまうかもしれない。被爆者が少なくなっていく日本では、今を生きる僕たちが戦争の恐ろしさ、平和の尊さを伝えなくてはならないと強く思った。

11時2分のある日から



郡山市立喜久田中学校2年 熊田桃子

1 派遣研修への参加に当たって

「カステラ、ハウステンボス」

初めに「長崎」と聞き私が思い浮かべたものである。社会の授業で長崎に原爆が落とされた事は知っていた。しかし、実感が湧かないせいか、記憶にはあまり定着していなかった。今回、先生から長崎派遣団の話があったとき、心の奥から、実際に現地を見て、そこで聴き、触れてみたいとの思いが湧き上がった。

「原爆のこと、長崎のことをもっと知りたい」
この思いから研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

ここには、永井隆博士の一生や出版された本などが展示してあり、永井博士の平和への気持ちや伝わってきた。中でも印象深いのが、「如己愛人」という言葉である。「如己愛人」とは、キリスト教の聖書の一節「己の如く隣人を愛せよ」との意味である。白血病という持病を抱え、さらに自らも原爆により被爆しながらも、多くの被爆者の救護活動にあたった永井博士。その永井博士が生きる指針とした言葉だ。「如己堂」とは、重い病にかかりながらも人々を助ける永井博士に贈られた、たたみ2畳ほどの小さな木造の家である。ここで寝たきりとなっても、原爆を原因とする病気の研究を行い、17冊もの著作を残した。寝たきりになっても「如己愛人」の精神を貫いた永井博士の生き方に、強く感動した。

(2) 平和公園

この公園は、原爆落下中心地公園の北側にあり、悲惨な戦争をもう二度と繰り返さないという誓いと、平和への願いを込めて造られた。平

和公園には「平和の泉」というものがある。被爆のため水が飲みたくても飲めずに亡くなっていった方たちに水を捧げるために建てられた。

実際に訪れてみると、世界各国から贈られた平和に関する像が並んでおり、他の場所とは違う特別な空間のように思えた。

そこで目を引いたのは、高さ9.7メートル、重さ30トンの「平和祈念像」である。天を指した右手は「原爆の脅威」を、水平に伸ばした左手は「平和」を、軽く閉じた瞼は「原爆犠牲者の冥福を祈る」という意味を表している。この願いを世界に向けて、平和祈念式典は執り行われている。

私は、さまざまな人の平和への想いを引き継ぎ、この空間を守っていかなければいけないと強く感じた。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムには、全国からたくさんの方が集まった。司会進行やガイドなどをされるホスト役のピースボランティアの方たちと、交流の中で意見を交わし、平和への考えを深めていく場である。

その中でも特に印象に残ったのは、被爆した方の体験講話だ。この講話では、被爆した方の凄惨な話を聴いた。被爆により小学生の時からいじめにあい、大人になってからも周囲の人から偏見の目で見られ、そのことが原因で自殺をしようとしたことなど、正直、耳をふさぎたくないような場面もあった。この講話で、からの痛みだけでなく、こころの痛みも伴う体験をされたことを聴き、原爆の恐ろしさをさらに痛感した。



< 止まった時計、でも平和の針は進んでいる。 >

3 心に残ったこと

私が一番心に残った写真は、原爆資料館に展示されていた、この「11時2分で止まってしまった時計」である。原爆落下中心地に近い所では、3,000度以上の熱線や強大な爆風によって、一瞬であらゆるものが破壊され、焼き尽くされた。この時計も、原爆落下中心地から約800メートルの場所にあり、爆風で損傷し、時計の針が爆発の時刻11時2分で止まってしまった。私には、一瞬にして焼かれ亡くなった方々の魂が、この11時2分で止まってしまったかのように思えた。亡くなった方々は、止まった時間の中にいるのかと思うと、胸がしめつけられるようだった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、今まで原爆についてあまり関心もなく、授業やテレビ番組から知識は得ていたものの、そこまで深く理解しようとしていなかった。だが、今回の研修に参加したことによって、いろいろな体験をすることができた。被爆者の方の講話を聴き、平和公園や原爆資料館で見て触れて、ピースフォーラムで考えたこと思ったことを話し合い、「原爆」というものを今までよりもっと身近に感じるすることができた。

7万人もの命を突然に奪った原爆。今まで当たり前のように接してきた家族や友人などと二度と会うことができなくなったら、どれだけ辛いだろうか。二度とこの悲惨な出来事が起きないようにするために、原爆の恐ろしさを伝えていかなければいけない。

時計は、11時2分で止まってしまったが、平和の針は進んでいる。

平和を願って



郡山市立熱海中学校2年 増子知希

1 派遣研修への参加に当たって

私は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたというニュースを見て、長崎が長い歴史のある街だということを知った。しかし、73年前に戦争によって原子爆弾が落とされ、大変な被害を受けた長崎が復興するまでには、大変な道のりだったと思う。福島も現在、東日本大震災による原発事故から復興に向かって進んでいる。私は、原爆が投下されたときどんな状況だったのか、現地でいろいろ見て勉強したいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士は、白血病に侵され余命3年と診断されたが、その2か月後に長崎に原爆が落とされ、勤務中に被爆した。自身も大けがを負い、何度も意識を失いながらも救護活動を行った。自分も被爆しながらも、人を助けるために活動した博士はすごいと思った。

如己堂は、教会の仲間が建てた2畳ほどの小さな家だ。「如己」には「己の如く隣人を愛せよ」という意味がある。博士は寝たきりになりながらも、人々に平和と命の大切さを訴えるために執筆活動を続けたそう。博士の著書「花咲く丘」の中に、「戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである。」という言葉がある。私も人々が殺しあったり傷つけあったりする戦争は、絶対にしてはならないと思う。

(2) 原爆資料館

原爆資料館に入ると、目の前に11時2分を指して止まった柱時計があった。文字盤はゆがんでいた。次に目にとまったのは、長崎の街を

一瞬で焼け野原にした原子爆弾「ファットマン」の実物大模型だ。この爆弾によって多くの人々の命が一瞬で失われたと思うと、背筋がぞっとした。その他にも、原爆による惨状を示す展示がされていた。私の中でも怖いと感じたのは、被爆者救援列車を描いた絵だ。見た瞬間に人々の苦しみが伝わってきて、見ているのがつらかった。原爆はとてつもないものだ改めて感じた。世界では、核兵器を保有する国や新しく作る国もある。唯一の被爆国として、核兵器廃絶を訴え続ける必要があると思う。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムには、全国から約500名の青少年が参加した。1日目は、被爆者の小峰秀孝さんのお話を聞いた。小峰さんは4歳8か月の時、爆心地から1.5キロの自宅近くの畑で被爆された。それにより両手、両足、腹部を火傷し、足は3回手術を受けられたが、まっすぐ歩けずに学校まで1時間もかかったそう。小峰さんは、「原爆のせいだけがをしたことが憎かったし、悔しかった」とおっしゃっていた。しかし、「あなたにしかできない話がある」と言ってもらえたことで、語り部として活動されているそう。私は、小峰さんの大変な子ども時代の話聞いて心が苦しくなった。

2日目は、班に分かれて、「なぜ戦争が起きるのか」、「その解決策はあるのか」など、平和について話し合った。私たちの班では、「資源を求めて国同士が争うのが戦争の原因のひとつではないか」という意見にまとまった。今でも国同士で話し合ったりしているが、戦争や核兵器の使用は絶対に起きてはならないと強く感じた。



< 長崎の鐘 >

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園にある長崎の鐘である。平和祈念式典では、犠牲者の追悼のために鐘が鳴らされた。私は、その鐘の音が今でも印象に残っている。当時、爆心地には多くの軍需工場があったそうだ。長崎の鐘は、原爆投下後33回忌を迎えるとき、そこで亡くなった方々の冥福を祈り建てられた。「あのようなむごい原子爆弾が再びこの地球上で炸裂しないためにも、この鐘を鳴らし続けて恒久平和の確立を世界の人々に訴える」という思いが込められている。私は、この鐘の意味を知って胸が苦しくなったと同時に、二度と人々が戦争や核兵器によって苦しむことのない、平和な世界になるように祈りたいと思った。

原爆は、10秒の惨劇で、一瞬で多くの人々の命を奪った。そして、放射能の影響は1週間、1か月、1年、10年以上に及んだ。長崎原爆死没者名簿の一冊目は白紙だそうだ。なぜかという、お名前が分からない死没者の方々を供養するためだ。亡くなった方々や家族の悲しみは、想像するだけでも耐えられない。

2017年現在で、世界中に合計約14,900発の核弾頭があるそうだ。どうすれば核兵器がなくなるのかをみんなで考え、平和な社会の実現を目指したいと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は今回の研修に参加して、戦争は絶対に起きてはならないと強く感じた。長崎の街は、今では世界新三大夜景に選ばれるほど、美しくなっている。しかし、73年前の戦争で原爆が落とされ、焼け野原になった長崎が復興するのはとても大変だったと思う。以前、長崎出身の知り合いの方に、現在の長崎の平和公園は市民の憩いの場として多くの人々に利用されていると聞いていた。実際に行ってみると、とてもきれいな公園だったが、モニュメントをよく見ると一つひとつに意味があって、原爆の悲惨さを伝えたり、犠牲者の冥福を祈るためにつくられたりしたものだった。

平和公園で原爆投下日の8月9日に行われた平和祈念式典の中で、被爆者の合唱があった。この歌に「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞があった。この平和を願う歌を聴いて、このような悲惨な出来事が二度と繰り返されないように、私もずっと平和を願い続けようと思った。

平和を願って



郡山市立湖南中学校2年 小山美樹

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日午前11時2分、長崎に1発の原子爆弾がアメリカのB29によって投下された。私はそれしか知らない。しかし、それだけではいけないと思う。なぜなら、私たちは戦争を知らない世代だから、昔あった出来事を知らないと、また同じ戦争を繰り返してしまうと思うからだ。

私は今回の長崎派遣を通して、73年前に長崎であった事を学び、平和の大切さや命の尊さ、核兵器廃絶の必要性を考え、多くの戦争を知らない世代に伝えたいと思い、長崎派遣への参加を決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎市永井隆記念館

永井隆記念館には、博士にまつわるたくさんの資料が展示されていた。永井氏は、満州事変、日中戦争の二度の従軍を経て、医学博士になった。1945年6月に過度の散乱放射線被曝による慢性骨髄性白血病を患い、あと3年の命と診断された。更に、同年8月9日に長崎市に投下された原子爆弾で博士は市民とともに被爆、右側頭動脈切断の重症を負い、妻までも失った。にもかかわらず、博士は我が身もかえりみず、生き残った医師や看護婦、技師とともに、何度も意識を失いながらも救護活動を行った。

もし私が、「あと3年しか生きられない」と言われたり家族を失ったりしたら、絶望して何もできないと思う。しかし、博士は寝たきりになっても17冊もの本を書くことで、人々に平和と命の大切さを訴え、生きる希望と勇気を与えた。私には真似をすることはできない。それだけ博士の平和への強い思いを感じる。

(2) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、原子爆弾の脅威を後世へ伝える大切な資料がたくさん展示されていた。原子爆弾の投下によって、長崎市の約3分の1に当たる広い地域が焼き払われ、73,884人ものが亡くなった。そのうちの65%は老人や子ども、女性だった。爆心地の近くで見つかった米は、炭のような真っ黒いものに変化し、爆心地から800メートル離れた民家にあった時計は爆風で壊れ、時計の針は原爆が爆発した午前11時2分を示している。更に、爆心地から約4.4キロ離れた板壁には、はしごと監視兵の影が焼き付けられていた。

この73年前に起きた事実を、私は原爆資料館で見たり聴いたりして、想像をはるかに超える被害にとっても驚くとともに怖くなった。原子爆弾により、一瞬にして今までの生活が奪われてしまった。もう二度とこんな悲しみを繰り返してはいけないという思いが、今まで以上に大きくなった。

(3) 青少年ピースフォーラム

1日目は、小峰秀孝さんの講話を聴いた。小峰さんは、4歳8か月の時に被爆し、両手、両足、腹をやけどされた。足が変形し靴が履けなかったため、裸足で過ごしていた。そのため、いじめられていた。小峰さんの「被爆者だから結婚を許してもらえなかった」という話が心に残り、被爆した方への偏見を持たないことが大切だと思った。平和学習では、紙芝居やスライドを見たり、フィールドワークをしたりした。

2日目は、他の地域の人たちと、戦争や争いの原因とその解決策について意見交換を行い、戦争について話し合う機会を設けることの大切さが分かった。また、MY平和宣言を書くこと



< 博士の直筆書「平和を」>

により、それまで以上に「平和」とは何かを考えるようになった。

3 心に残ったこと

私がこの写真を選んだ理由は、資料には「平和を」と書いたと説明されているが、私には「平わを」と書いてあるように見えたからだ。この写真は、永井隆博士が再び争いが起きないことを願って書いた文字である。博士はこの文字を半紙に1,000枚書き、日本国内だけではなく、世界中の人々に送り、ともに平和な世界を目指して努力するように訴えた。私には博士のような行動力はないが、今回の長崎派遣で学んだことを多くの人に伝えることで、博士の思いを受け継いでいくことはできると思う。

博士自身が、被爆した時の様子を「此世の地獄。地上一切の物は瞬時に粉碎せられ地球が裸になった。」と書いている。地獄と聞くだけでも悲惨な様子が想像できる。被爆を経験し原爆の恐ろしさを知り、平和への思いを強く持つ博士だからこそ、この文字が書けたのだと思う。

この文字から私は、博士の穏やかな平和を願う気持ちが感じられた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎派遣に参加したことで、平和の大切さや命の尊さ、核兵器廃絶の必要性などたくさんのことを学ぶことができた。

戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを経験したことがある被爆者の平均年齢は、80歳を超えている。被爆者の人数が減っていることを知り、私は「戦争や原爆のことを知らない人が増えてしまったら、忘れられてしまわないか、また同じことを繰り返してしまわないか」と、とても心配になった。このような現状だからこそ、私たちの世代が73年前にあったことを学び、考え、多くの人に伝えることが大切だと思う。

今回、約7万人の方が亡くなった長崎で、私は、言葉にできない程の悲惨さを物語るたくさんの方の資料を目にし、戦争をもう二度としないことや、核兵器を廃絶することがいかに大切なのかを、肌で感じる事ができた。

これから私は、報告会や文化祭などを通して、たくさんの方に伝える機会がある。だからこそ、しっかりとその責任を果たし、平和な世の中が、いつまでも続くように願おうと思う。

身近なところから平和をつくる



郡山市立守山中学校2年 米本 響

1 派遣研修への参加に当たって

私には、長崎に行きたい理由があった。それは、ニュースで北朝鮮の核開発や核兵器のことが話題となることが多く、核兵器に対するはつきりとしなない心配や怒りの気持ちがあったからだ。実際に被爆地である長崎に行って、戦争や原爆について学ぶことで、その漠然とした心配や怒りの気持ちを少しでも整理したいと考え、参加した。

2 派遣研修に参加して

今回の派遣研修で初めて訪れた長崎。そこには緑豊かな山々と綺麗な海があり、これらに囲まれるように街は広がっていた。とても73年前にあの恐ろしい原子爆弾が投下されたとは思えないほど美しい街だった。

(1) 長崎原爆資料館

ここには、原爆が生み出した惨劇を物語る様々な展示品や写真があった。

その中でも特に印象に残った物は、被爆者の写真だ。その写真に写っている人の皮膚は焼かれ、ただれていた。その人は幼い頃に被爆したのに、お年寄りになっても原爆による傷は消えていない。私は、改めて原爆による被害の深刻さを感じた。

その写真に写っていた人は、日本原水爆被害者団体協議会の山口仙二さんだ。山口さんは、「原爆を経験していない人に被爆者の心身の傷を理解してもらうことは難しい。」と思い、焼かれた身をさらされたそうだ。

山口さんは、永遠に癒えぬ傷を永遠の写真に託し、世界の平和を訴え続けていた。私は、山口さんの思いをこれから伝えていかななくてはならないと感じた。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、2日間にわたって行われた。ピースボランティアという青少年ピースフォーラムの運営を行ってくれる方の進行のもと、全国の平和使節団の仲間と共に、被爆体験講話やフィールドワークを通して被爆の実相や平和の尊さについて学んだ。

1日目には被爆体験講話があった。講話をしてくださったのは小峰秀孝さんだ。小峰さんは明るい方で、とても被爆者には見えなかった。しかし、講話を始めるとどこか悲しげな表情だった。小峰さんは、爆心地より1.5キロの自宅近くの畑で被爆された。熱線の影響で両手、両足、腹を火傷された。当時、医師にも、余命はわずかしかないと言われたそうだ。それでも小峰さんは生き延びた。生き延びることができたのは家族のおかげだと言う。このとき、大変な時に助けてくれるのは家族だということを改めて知った。だから、これからもっと家族を大切にしていこうと思う。

小峰さんが最も辛かったのは、社会の偏見と差別だと言う。就職しようとすれば、決まって「被爆者はだめ」と言われた。そのとき小峰さんは、「死にたい」と思うほど追い込まれたと言う。

このとき私は感じたことがある。それは、原爆の恐さを語る上で大切なことは、死傷者の数だけではなく、被爆者のその後の人生への影響を知ることである。

辛い思いをされた小峰さんがしてくださる講話には、「私達に核兵器がどれだけ恐ろしいものかを後世に伝えてほしい」という願いが込められていると思った。だからこそ小峰さんの講話を無駄にしないよう、これからこのことを伝えていきたい。



< 平和への第一歩 >

3 心に残ったこと

私が特に印象に残ったことは、この青少年ピースフォーラムの中での班活動だ。1日目にフィールドワークがあったが、お互いに緊張していてあまり会話が弾まなかった。その日の夜に同じ班の人達との交流会があり、徐々に仲良くなった。2日目は班での活動が多く、ピースボランティアの方達や班の人達で意見を出し合い、「戦争はどうやったらなくなるのか」などについて、とても良い話し合いが出来た。

そして、この経験から、戦争はどうしたらなくなるのかを自分なりに考えた。その結果、争いを防ぐためにはたくさん話し合いをすればよいのではないかと考えた。私は、今回の研修で出会った人達に対して、初めはどんな人達か分からず、きつい性格や怖い性格の人達なのではないかという漠然とした不安を抱いていた。しかし、交流会を通して互いに会話をすることで、相手の人柄が分かり、良いところが見えてきて、とても安心して活動することができた。ということは、国どうしも同じことではないかと思うようになった。国どうしが話し合いをたくさんすることで、相手の国のことをもっとよく知ることができ、争いもなくなるのではないかと考えた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの派遣研修を通し、核兵器の恐ろしさを詳しく知ることができた。これは、行った先々にあった原爆の爪痕が残る建物や平和公園にあったオブジェなどの資料を、実際に見たり触れたりすることで学ぶことができた。こうして、核兵器がどんなものかを知ることによって、研修に行く前とは考えが変わったことがある。今までは核兵器について分からないことが多く、はっきりとしないことで漠然とした不安や心配があった。しかし、今では核兵器の恐ろしさが分かったことで、今まで以上の不安や心配、そして怒りが私の胸の中にある。この胸の中にある気持ちがいつか晴れることを願って、まずは身近な人達に長崎で感じたことを伝えていこうと思う。

今の世界には数え切れないほどの核兵器がある。しかし、今は難しくても、いつか核兵器がなくなるその日まで、日本は唯一の被爆国として核兵器廃絶を訴え続け、恒久平和を求めていかなければならない。

平和な世界



郡山市立高瀬中学校2年 濱 津 優 子

1 派遣研修への参加に当たって

長崎派遣事業への参加者を募集すると聞いて、なかなか体験することができない貴重な機会だと思い、ぜひ参加したいと思った。私は、以前から長崎という場所に興味を持っていた。長崎派遣事業に参加できることが決まった時、改めて長崎とはどのような街なのか、どのような歴史があるのか調べた。長崎は、太平洋戦争で原子爆弾が投下された地である。それと同時に平和の中心地でもある。そのような場所へ行くことが、今後の私の考え方、行動に大きな変化をもたらしてくれるのではないかと考えた。

実際に原子爆弾が投下された場所へ行き、現在も残る長崎の街に点在する被ばく建造物を見学し、平和祈念式典に参列することで、資料だけでは分からない原子爆弾によって失われた人々の生活や原子爆弾が投下されて焦土と化した長崎の復興の様子を学び、私の周囲に原子爆弾の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、そして平和な世界の大切さを伝えたいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆博士が願った未来の平和

長崎に到着した初日、放射線医師だった永井隆博士が戦後暮らした如己堂と隣接する、長崎市永井隆記念館を訪れた。永井博士は放射線を使って結核の診断をしていたが、自らも大量の放射線を浴びたことによって白血病になり、余命3年と診断される。その年に長崎に原子爆弾が投下された。永井博士自身も頭にケガを負いながら、原爆により傷ついた人々のために懸命に救護活動を行った。私は、永井博士の残した「己の如く隣人を愛せよ」という言葉が強く心に残っている。永井博士の自分の身を顧みず一

人でも多くの負傷者を助ける姿は、まさに博士が残したこの言葉通りの生き方である。私は、人に無関心なところがあり時々自分ファーストな考えをしてしまう自分の姿を思い浮かべてしまった。

永井博士の利他の心を学んだ1日目だった。

(2) 平和公園の祈り

長崎派遣2日目には、平和の祈りの中心、平和公園を訪れた。公園がある場所には、当時刑務所が建てられていた。そこには日本に連れてこられた外国人も収容されていたそう。原子爆弾は、長崎の人々だけでなくその時長崎にいた人々全てを傷つけたという事実を知ることができた。

原爆資料館には、原子爆弾の恐ろしさを物語る様々な資料、遺品が展示されていた。中でも印象に残ったことは、原子爆弾の核となるプルトニウムは手のひらに乗るほど小さなものだったということだ。こんなに小さな核(プルトニウム)が多くの人々の命を奪ったという事実、驚くと同時に核兵器に対してより生々しい恐怖心を抱いた。

(3) 平和について考えた2日間

8月8日から9日にかけて、青少年ピースフォーラムに参加した。ピースフォーラムでは、初日に被爆者の方から直接、原子爆弾の被害についてお話を聴くことができた。これからどんどんこのような機会が失われていく中、とても貴重な体験をすることができたと思う。

2日目には、ピースボランティアの方々や全国各地から集まった仲間たちと、戦争をなくすために私たちにできることについて考えた。様々な意見があり、なるほどと感心する内容が数多くあった。



< 想いをのせて >

3 心に残ったこと

今回の研修中に、よく目にしたのが千羽鶴だった。平和公園や原爆資料館など至るところに飾られていた。中でも印象的だったのが、平和祈念式典のため全国各地から会場に送られてくるたくさんの千羽鶴だ。私が最初に平和公園を訪れた時は、まだ午前中だったためか新しく奉納された千羽鶴は少なかったが、その翌日に平和祈念式典に参列するために訪れた時には、たくさん色とりどりの千羽鶴が奉納されていて驚いたことを覚えている。この千羽鶴には、たくさんの人々の平和を願う気持ちが込められている。こんなにも平和を望む人がいるのになぜ世界では未だに争いが起きているのだろう。

青少年ピースフォーラムで、私になるほどと思った意見がある。「なぜ戦争が起こるのか？」という問いに対して、「戦争をしたいと思っている人がいるから。」という回答をした人がいた。私はその答えの逆を考えた。戦争をしたいと思っている人がいるから戦争が起こってしまうのなら、世界中の人々が平和を願えば戦争のない世界が訪れるのではないだろうか。長崎という場所でこのたくさんの千羽鶴を見てほしい、平和を願う人々の思いをぜひ世界中の人々に見てほしい、そして一人でも多くの人々が平和な世界を目指すようになってほしい。私はこの千羽鶴を見て、そんな思いが込み上げてきた。千羽鶴がこれからも増え続けることを心から願う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

長崎派遣で、実際に被爆者の方のお話を聴くことができたのは、とても貴重な体験だったと思う。これから戦争を知る世代がどんどん少なくなっていく。この体験を次の世代に伝えるのは誰なのか。それは私たち若い世代なのではないか。戦争の悲惨さ、人々に与えた大きな被害、もう二度と戦争をしてはいけないという思いを引き継ぎ伝えるためにも、今回の長崎派遣事業に参加することができたこと自体とても幸運なことだと思う。今回学ぶことのできた、原子爆弾の恐ろしさや戦争で失うものの大きさを、積極的に周囲に伝えていきたいと思った。これからの未来を担っていく私たちが過ちを犯すことがあってはならない。そのためには過去の過ちを知ることが必要だと思う。

現在の日本では、戦争を経験したことがない人が増えている。これは、日本国内で平和な世の中が続いているという点では良いことだ。しかし、世界では依然として各地で戦争やテロが起こっている。私が平和な世界を実現するためにできることは、今回の体験を広く多くの人に伝えることだ。私の伝えた内容が、一人でも多くの人々の心に残り、平和な世界を願う人が増えることを望みたい。

私だけでは戦争を止めることはできないし、戦争を防ぐこともできない。しかし、「私たち」ならできるかもしれない。

平和の大切さを伝える



郡山市立二瀬中学校2年 降 矢 優之介

1 派遣研修への参加に当たって

戦後73年がたった今、世界中の人々は、戦争や原爆の恐ろしさ、それによる被害を知っているのだろうか。僕は、1945年8月9日、長崎県に原爆が投下されたことは知っていた。しかし、それによってどれだけの被害があったかは分からなかった。自分の目で見たり、直接話を聴いたりして、深く知りたいと思った。今年、被爆者の平均年齢は82歳を超えるということで、この機会を逃したら直接話を聴くことはできなくなると思い、この派遣事業に参加したいと思った。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

この資料館では、被爆資料や原爆による被害の惨状を記録した写真などが展示されていた。スロープをぬけると、原爆が投下された11時2分で止まった柱時計が展示されていて、とても印象に残った。この時計は、爆心地から約800メートルの、山王神社付近の民家にあったものとされている。800メートルも離れているのに、爆風で損傷したことに驚いた。

爆心地付近では、あまりの高温のため一瞬のうちに身体が炭のようになり、爆風により建物は破壊され、人々は吹き飛ばされ、目に見えない放射線の影響により様々な病気が引き起こされた。

長崎の街が一瞬にして破壊され、多くの人が命も財産も奪われたことを知り、改めて原子爆弾の恐ろしさを感じた。そして、もう決して同じようなことは起こしてはならないと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、全国から集まった小学生、中学生、高校生が、2日間に渡り平和について考える活動である。このピースフォーラムで、被爆者の小峰秀孝さんの話を聴くことができた。

小峰さんは被爆当時4歳8か月。爆心地より1.5キロの自宅近くの畑で被爆し、両手、両足、腹を火傷し、足は3回手術を受けておられる。戦争が終わっても火傷が原因でいじめられていた。自殺しようと思われたこともあったそうで、原爆というものは、人の命を奪い、建物を破壊しただけではなく、心にも大きな傷を負わせてしまったのだと考えさせられた。

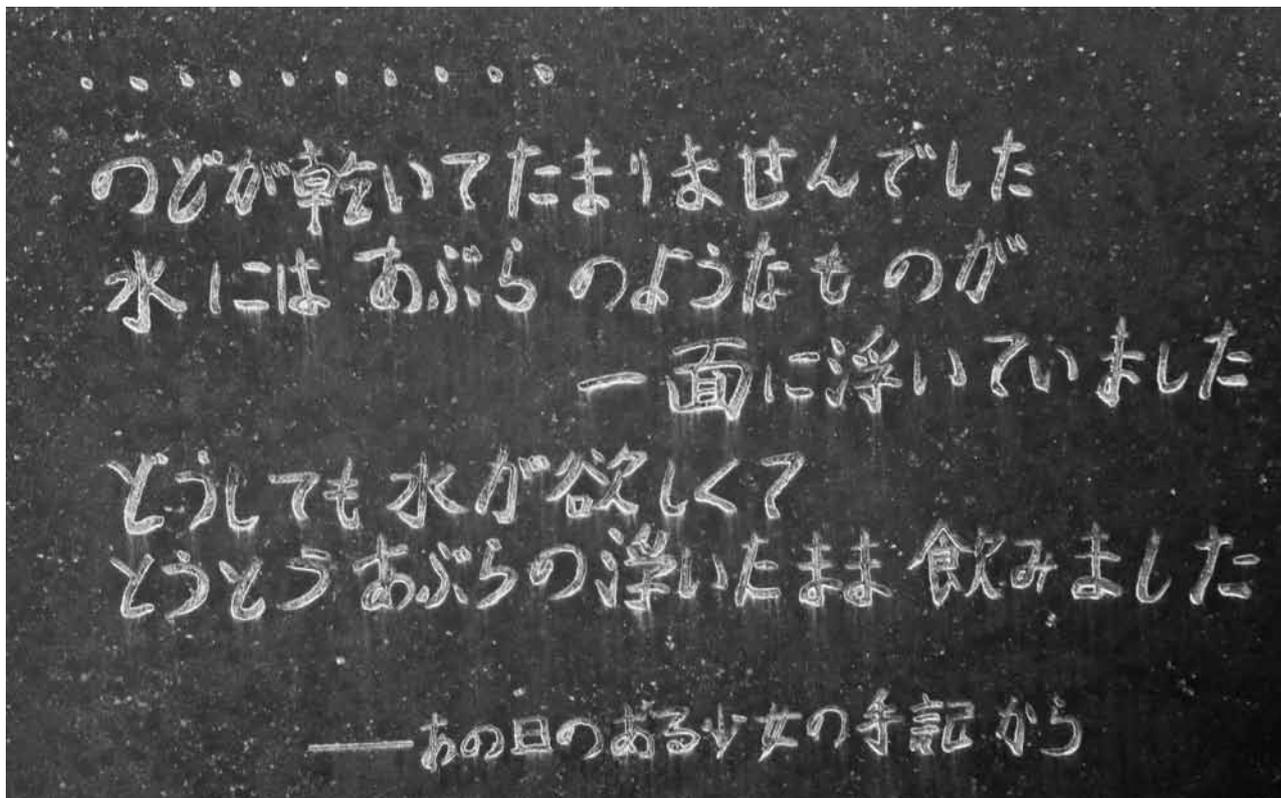
また、その講話で印象に残っていることがある。それは、小峰さんがおっしゃった、「人が作ったものは人が壊すことができる。核兵器だってミサイルだってハンマーで壊すことができる。皆さんにはそのハンマーになってほしい。」

という言葉だ。その言葉が強く心に響き、僕もそのハンマーになりたいと思った。

(3) 平和祈念式典

2018年8月9日。僕は平和祈念式典に参列した。午前11時2分、1分間の黙とうを捧げた。73年前のこの時刻に原子爆弾が投下され、7万3,884人という多くの人の命がその年のうちに奪われた。式典の初めに、被爆者の方々の「もう二度と」という合唱があった。

その中に、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が出てくる。もう二度と原爆による悲劇を繰り返さないでほしい、という被爆者の願いが伝わってきた。この場にいた僕は、被害



< 平和の泉 >

に遭われた多くの方々の「もう二度と」という想いを、今、そして次世代にも、伝えなければいけないと心に刻んだ。

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園にある「平和の泉」の石碑である。原爆で焼けただれた被爆者は「水を」「水を」と、うめき叫びながら亡くなったそうだ。

「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

これは9歳の女の子の手記である。熱くて熱くて、水が欲しくてたまらなかった苦しみが伝わってくる。73年前、現実としてこのような悲劇が起こってしまったことは、変えられない。だからこそ、未来に向かって、平和を維持する取り組みを皆でやっていかなければならないと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

僕はこの長崎派遣事業を通して、原爆の惨劇を自分の目で見て、被爆者の体験を直接聴くこ

とで、戦争や原爆の恐ろしさを深く知ることができたと思う。

長崎平和祈念式典で、田上富久長崎市長による「長崎平和宣言」を聴いた。田上市長は、「平和な世界の実現に向けて私たち一人ひとりにできることはたくさんある。被爆地を訪れ、核兵器の怖さと歴史を知ることはその一つで、体験は共有できなくても、平和への思いは共有できる。」

ということをおっしゃっていた。僕はこの言葉を重く受け止めた。現在、被爆者の平均年齢は82歳を超え、原爆の悲惨さを身をもって伝える人が減ってきている。今、僕ができることは、長崎派遣団員として直接見たり聴いたりしてきた原爆の恐ろしさを、周りの友達や郡山の皆さんに伝え、もう二度と原爆による悲劇を起こしてはならないと、強く訴えることだと思う。田上市長がおっしゃっていた、「平和への思いは共有できる」ということを「伝える」ことで、実行していきたい。そしてその取り組みが、小峰さんがおっしゃっていた「核兵器だってミサイルだってハンマーで壊すことができる。皆さんにはそのハンマーになってほしい。」という、強い願いに応える第一歩だと信じる。

私の使命



郡山市立郡山第一中学校2年 橘内祐奈

1 派遣研修への参加に当たって

次々に倒れていく兵士たち、飛び散る人の肉、血の海。これは、「少年は戦場へ旅立った」という物語で、自ら喜んで戦場へと向かった少年が目の当たりにした光景だ。実話であるこの本を読むまで、私は、戦争からあえて目を背けてきた。残酷で恐ろしいことに触れるのが怖かったからだ。しかし、この本を読み、人によって戦争に対する価値観がこんなにも違うものなのかと驚き、現実の「戦争」というものはいったいどういうものだったのか知りたくなった。そこで、原子爆弾投下によって終結した戦争について学び、平和であることの大切さを知るため、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

初めて訪れた長崎の街は、人や緑に溢れていて、73年前に原子爆弾が投下されたと聞いても、にわかには信じられなかった。

(1) 長崎原爆資料館

原爆資料館には、73年前の戦争や核兵器に関する写真、展示物がたくさんあった。原子爆弾が投下された11時2分で止まったままの時計、熱で溶けてくっついてしまったガラス瓶、黒焦げとなった少年や全身をやけどした少女の写真…。中には、思わず目を背けたいような写真もたくさんあった。73年前の人々の苦しみの声が聞こえるようだった。悲惨な状況の写真を目の当たりにして、過去にこのように残酷な行いが行われていたことが、私の中で現実の出来事として捉えることができるようになった。

展示物の中には、「ファットマン」と呼ばれる、かつて長崎に投下された原子爆弾の模型があった。私は、その模型を見てぞっとした。火薬や

核物質など、人体へ影響を及ぼすたくさんの物質が隙間なく詰められたこの物体。これが、私たちの住む平和で美しい街に投下されたら…。私は、たった一発の原子爆弾で、たくさんの人々の命が一瞬のうちに奪われるということに、想像していた以上の恐怖を覚えた。そして、二度と核兵器を使ってはならないと強く感じた。また、この世界から一刻も早く核兵器がなくなるよう、様々な人に戦争の恐ろしさや原爆の被害について発信していきたいと思った。

(2) 青少年ピースフォーラム

私たちと同世代の生徒が全国から集まって行われた青少年ピースフォーラムは、被爆者の小峰秀孝さんの講話から始まった。小峰さんは、4歳のときに被爆された。爆心地から約1.5キロも離れたところにいたにも関わらず、原子爆弾の強烈な熱線で全身をやけどされた。私は、スクリーンに映った小峰さんの脚を見て絶句した。溶けて、変形していたのだ。私は、壊れたり形が変形したりしたのは、ガラスなどの「モノ」だけだと思っていた。人間の体までもがどのように変わり果ててしまうのかと恐ろしかった。原子爆弾の脅威は、その場にあった全てのものに降りかかるのだ。私は、小峰さんの「人間がつくったものは人間が壊すことができる」という言葉がとても印象的だった。「皆さんには、核兵器を壊すためのハンマーになってほしい」と。それは、戦争を体験された小峰さんの心からの訴えだった。

その後のこじんまりフィールドワークでは、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館や、原爆資料館の展望デッキなどへ行った。展望デッキから見た長崎の壮観な景色からは、やはり73年前の恐ろしい出来事は想像すらできなかった。



< 冥福を祈る平和祈念像 >

長崎の人々の復興への力を、改めて感じる事ができた。

(3) 平和祈念式典

式典では、午前 11 時 2 分に平和の鐘が鳴り、黙祷が捧げられた。73 年前の今と全く同じ時刻に原子爆弾が落とされ、たくさんの方が亡くなった。そう考えると、やはり戦争も、原子爆弾を投下することも、絶対にしてはならないと思った。

式典は、被爆者の方の合唱から始まった。曲名は「もう二度と」。その曲には、被爆された方々の悲しみや、「もう二度と被爆者を作らないで」という思いが詰め込まれていた。その中に、「あの青い空さえ 悲しみの色」という歌詞があった。青は、私が一番好きな色だ。でも、そのときばかりは、快晴の空の色が辛く悲しい色に見えた。

私は、長崎市長の平和宣言の中の「体験は共有できなくても、平和への思いは共有できます。」という言葉が胸に刺さった。あの忌まわしい出来事から、73 年という月日が経った。だが、今でも被爆者はその当時を覚えている。世代が変わっていくにつれ、戦争についてほとんど何も知らない人、また無関心な人が多くなっている。私もその一人だったと反省した。私は、戦争を体験していないからこそ、真実を知っていくことが大切だと強く感じた。

3 心に残ったこと

私は、平和祈念像がとても印象に残っている。この平和祈念像は、神の愛と仏の慈悲を象徴し、

水平に伸ばした左腕は平和を、横にした脚は原子爆弾落下直後の長崎市の静けさを、立てた脚は救った命を表し、少し閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っているようだ。この像からは、平和への強い思いを感じる事ができた。この感動をぜひ、世界の人々に知ってほしいと思った。そして私も、この像とともに犠牲者の方々の冥福を祈り、平和を願っていきたいと思った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4 日間を振り返り、私はこの研修に参加して、戦争の恐ろしさと平和であることの大切さを知ることができた。今回、この貴重な体験を通して、私は戦争についての意識が変わった。今、私たちは平和な時代に生き、恵まれた環境下にある。しかしそれは「当たり前」ではないのだ。過去の戦争という恐ろしい出来事を経て、今の平和な時代があるのだ。無関心が故に、過去の悲惨な出来事を風化させてしまう。私たちは、戦争を体験していないが、世界で唯一の被爆国民であるからこそ、真の平和を築くために、世界中の人々に長崎で起こった悲惨な出来事を伝えていかなければならない。私は、悲劇が二度と繰り返されないために、まず過去の戦争について知り、さらに、今なお続いている紛争についても他人事として捉えずに関心を持ち、真実を周囲の人々に伝えていきたい。それが、被爆者の方々と共に平和への思いを共有することに繋がっていくと思う。

これが、今回の郡山市長崎派遣団員である、私の使命なのだ。

平和への誓い、長崎から



郡山市立郡山第二中学校2年 木村拓真

1 派遣研修への参加に当たって

2018年6月12日、シンガポールで史上初となる米朝首脳会談が行われ、「非核化」について話し合われた。核兵器禁止条約の採択や、核兵器廃絶国際キャンペーン(I CAN)がノーベル平和賞を受賞するなど、常に世界中が核兵器のない世界を求めている。しかし、なぜ核兵器はなくなるのだろうか。核兵器の保有で威嚇しあっているのはなぜなのか。しかも、現在も次々と開発が続いているのはどうしてなのか。私は、核兵器の関わりに疑問を持ち、少しずつ調べるようになった。

被爆地長崎で現実を見て、触れて、人の思いを感じたいと願い、参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館(如己堂)

私は、永井博士の科学者魂の強さや、人に対する深い愛情に、尊敬の念を抱いた。博士は、被爆の深い悲しみや絶望感に押しつぶされそうになりながらも、“原子爆弾症”というこれまでどこにもなかった病気と向き合い、研究と治療で希望に変え、身を粉にして皆のために果敢に行動された医学博士だ。記念館と如己堂には、博士が命を懸けて必死に発信し残してくれたメッセージや展示物が並んでいた。展示の中で見つけた「原子爆弾は長崎でおしまい!長崎がピリオッド!平和は長崎から!」というメッセージは、私の重くなった気持ちを少し軽くし、勇気づけてくれた。現実を受け止め、未来のために前向きに変えようとする決意の力強さが伝わってきたからだ。私は、この思いを守っていききたい。博士から、前向きな心が復興への一歩だと教えてもらったような気持ちになった。

(2) 平和公園・平和祈念式典

公園内には、各国から贈られた平和と協調を祈念するオブジェが並んでいた。様々な表現を通して、同じ願いが込められていると感じた。

平和祈念式典は厳粛で、参加者の言葉や歌声、平和への祈りが、青く澄み渡る空から世界中に発信されていたようだった。

祈りとともに、現実の課題も共有された。国連事務総長のアントニオ・グテーレス氏は、核保有国の現状や解決目標をスピーチした。その中の「核保有国は、核兵器の近代化に巨額の資金をつぎ込んでいます。一方で、核軍縮プロセスが失速し、ほぼ停止しています。」というスピーチから実態を知り、私は落胆した。かつて核保有国は、核不拡散条約や国連総会決議第一号で「核軍縮に誠実に取り組む」と約束したはずなのに、どうして縮小しないのか、どうして「廃絶」ではなく「近代化」なのか。私は悔しくなった。国連事務総長は、核軍縮に全力で取り組むことを誓ってくれた。「核兵器の完全廃絶は、国連の最も重要な軍縮の優先課題」だと。必要性を理解してもらおう努力の一環として、反対意見を知ることや関心を集めることが重要だと思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

全国から集まった500名の小中高生や社会人の方々と、「戦争の原因とみんなにできる解決策」について意見を交換しあった。私の班の解決策は“対話”にまとまった。戦争の原因は「“自国ファースト”と“意見のズレ”を力で解決しようとしたことだ」と考えたので、今後は話し合いをしてお互いを知り、双方にベストな方法を見つけあうことを解決策として外交してほしいと思う。戦い傷つけあうことは何の解決にもならない。



＜原子爆弾「ファットマン」のレプリカ＞

初めて会った仲間たちとすぐに打ち解けられたのは、平和を強く願う目標が同じだからだと思う。新しい絆ができて嬉しく、今後の交流に意欲が沸いた。

3 心に残ったこと

原爆資料館に残されている、実物の遺品や直視するたびに胸が張り裂けるような痛みを伴う数々の写真、破壊され焼け残った被爆建造物が、心に残っている。ガラスに手の骨がくつつき、そのまま塊になっていた遺品など、見学の間にも何度も息を呑んだ。

この惨事を生んだ原子爆弾「ファットマン」の原寸大模型も忘れられない。高さは3.66メートルで、私の身長約2倍程度。幅は、両腕を広げたぐらいの大きさだった。決して大きいものではないが、威力と傷跡の責任は重大だ。

戦後も核兵器は生産され続け、現在も「ファットマン」をはるかに超える威力の核兵器が世界に約15,000発存在し、さらなる開発が進められていることは信じられない。核兵器を作るのはもう止めて、安全に処理できる方法の開発に力を入れてもらえないだろうか。その技術を応用して、私たちの住む福島原発事故や、原子力発電による廃棄物の処理などの不安を取り除いてもらいたい。日本に残る原爆の爪痕と被爆者の思いを発信し続け、核開発の中止と核兵器

廃絶を訴えていかなければならない。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間の研修を通して、平和を維持するために続けられてきた連携活動や、勇気を持った行動、被爆体験を伝承するような振り返りという努力に守られているおかげで、私たちは平和に暮らせていることが分かった。

研修をきっかけに、戦争の歴史や核兵器、世界で起こっている紛争などについての関心と、平和に対する多様なアプローチに関する興味が高まった。

研修は、関心が高い仲間が集まったので、移動のバスの中や宿泊先でもたくさんの会話ができたが、今後は、関心のない人にどのように関心を持ってもらうかが課題だと思っている。

だが、私はこの4日間の体験の中で、様々なアプローチの方法を学んだ。スピーチやディスカッションのほかにも、美術での表現や、歌声での表現もあった。演劇や紙芝居の上映も薦めたい。個々の趣味や特技や関心のあることと繋いで関心を高める方法があるのではないかなと思うので、機会を作って提案し実践していく。

そして私は、辛い体験を話してくださった被爆者の皆様の思いを受け継ぎ、核兵器廃絶と世界恒久平和の確立をともに訴え続けていく。

研修への参加の機会をいただき感謝したい。

平和への第一歩



郡山市立郡山第三中学校2年 高橋 萌乃

1 派遣研修への参加に当たって

私は小学生の頃に、広島と長崎に原爆が落とされてたくさんの犠牲者が出たことを習った。その他にも、原爆が落とされた8月6日と9日に毎年テレビで放送されている式典や特集を見て、原爆についてのイメージは持っていた。原爆は、たった一発でたくさんの人々の命を奪ってしまう危険なものだという印象を抱いていた。だが、平和な世の中になってほしいと誰もが願うと思うが、平和な世の中になるためにはどのようなことが出来るのかについては、あまり詳しく考えたことは無かった。

今回、長崎派遣事業についての話を先生から伺った時に、原爆が落とされた時の様子や詳細、平和な世の中になるために自分が出来ることは何なのかを知り、考えるととても良い機会だと思った。そのため、参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、11時2分で止まった時計や、高熱で溶けた6本の瓶、長崎型原爆の実物大模型、熱線によって残った影の写真など、原爆の恐ろしさや悲惨さが分かる様々な展示がされていた。

その中でも一番印象に残ったのは、長崎型原爆（ファットマン）の実物大模型だ。想像よりも小さく、特に原爆の中にあるプルトニウムの大きさは野球ボールくらいの大きさしか無かった。この一発の原子爆弾によって大勢の人々の命が奪われてしまった。このことから、どれだけ威力があったのかが分かる。このような核弾頭は現在、世界中に1万5千発近くもある。このままでは、再び同じような悲劇が起きてし

まうかもしれない。この現状を私たちが変えていかなければならないと再認識した。

(2) 平和祈念式典

私は原爆資料館ホールで式典の様子を見ていた。まず初めに、被爆者合唱が行われた。その歌詞に、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という一節がある。私は、その部分がとても印象に残った。被爆者の方々の辛さや平和への願いが心の中に強く響いた。被爆者の方々の願いを叶えるためにも、早く平和な世の中になってほしいと強く思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、様々な地域から来た人たちと一緒に平和について考えたり、被爆者の方の体験講話を聴いたりした。

平和について考える意見交換では、戦争の原因や、その解決策について考えた。私は、戦争の解決策は、まず戦争や平和に関心を持つことだと思った。特に、私たちのような中学生や高校生は全く関心を持っていない人が多い。このままでは、平和な世の中にならなくなってしまふ。平和への第一歩は、一人ひとりが平和に関心を持つことだと、青少年ピースフォーラムを通して考えた。



< 平和の泉の石碑 >

3 心に残ったこと

上の写真は、平和公園にある平和の泉の石碑だ。この石碑には、水を欲しがった少女の苦痛が記されている。原爆が落とされて、とても熱く喉が乾いたのだろう。あぶらの浮いた水を飲むということは、今では全く考えられないが、少女がどんなにつらく、苦しかったかが分かる。少女と同じように、水を欲しがりながら亡くなってしまった方もたくさんいた。

二度と同じような犠牲者を出さない、それが私たちの使命なのだとこの石碑を見て感じた。そして、この石碑が建てられた理由や石碑にこの言葉が刻まれた理由がよく分かった。それは、原爆により亡くなられてしまった方々の苦しみ、また平和な世の中になってほしいという願いを私たちに伝えるためなのではないかと思う。私たちは、必ず使命を果たさなければならない。

4 派遣研修に参加して感じたこと

1945年8月9日午前11時2分に長崎で起きた悲劇について、この研修に参加する前はあまり詳しく分からなかった。そのため、今回の研修で、原爆や平和について多くのことを学んだ。

多くを学んだ上で、一つ自分に対して思ったことがある。それは、自分が原爆や平和についてどれだけ分からなかったかを知り、どれだけ平和慣れしていたかと自覚したことだ。日本は治安が良く、テロや紛争などが無いため、平和だと安心してた。戦争を体験していない私たちは、特に平和慣れしていて、戦争や平和について知識も関心も無いままだ。これで、日本は本当に平和だと言えるだろうか。平和な世の中を創っていかねばならない私たちが、このまま生活していってしまうと、本当の平和は訪れないままだ。

平和のためにまずは、戦争や平和について関心を持って、一人ひとりが平和を創っていくべきだと思う。

平和の尊さ



郡山市立郡山第四中学校 2年 鈴木 拓 紀

1 派遣研修への参加に当たって

昨年、国際連合で核兵器禁止条約が採択された。そして、条約の採択に大きな貢献をした核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞した。このニュースが、新聞やテレビで大きく報道された。これまでは、「核兵器」についてただ漠然としたイメージを持っているだけであった私は、今まで以上に意識するようになった。

私たちは、戦争のない幸せな時代に生まれ、戦争を知らない世代だ。だからこそ、被爆地である長崎を実際に訪問し、自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の耳で聴くことで、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさ、そして「平和の尊さ」をしっかりと学んできたいと思い、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

永井隆博士は、原爆で妻を亡くし、自らも被爆して重傷を負ったにもかかわらず、医学者として周りの被爆者の救護にあたった人である。被爆前から患っていた白血病が悪化する中、あの一瞬で大切な家族を亡くしたショックを考えると言葉を失う。そんな状況でも、自分より他人を優先し治療にあたった姿に強く心を打たれた。永井博士が被爆後生活した「如己堂」は、「己の如く隣人を愛せよ」という聖書の一節から名づけられた。これこそが、平和を願い続け、自分のように隣人を愛した永井博士の生き方そのものであると思った。

この場所を訪れ、原爆の恐ろしさはもちろん、他人を思いやる気持ちの大切さを学んだ。この気持ちこそが、戦争や核兵器をこの世界からなくすために絶対に必要であると強く思った。

(2) 平和祈念式典

被爆 73 年となる 8 月 9 日。平和祈念像が見守る平和公園で、国連事務総長が初めて参列する中、平和祈念式典が行われた。原爆死没者は、今年で 179,226 人となった。73 年前に原爆が投下された午前 11 時 2 分には、犠牲者のご冥福を祈り、1 分間の黙祷を捧げた。青く澄んだ空に、平和の鐘が響き渡った。長崎が歩んできた 73 年を思うと、この時間がものすごく深く重く感じられた。そして、この青く澄んだ空を守っていくことが、私たちの使命だと強く感じた。

式典のはじめに、被爆者による「もう二度と」の合唱があった。悲惨な過去を見つめつつも、この先の未来の平和を願う強い想いがひしひしと伝わってきた。何度も繰り返された「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が、長崎を最後の被爆地にという強い願いとして、私の心に大きく響いた。

被爆者の平均年齢は、今年 82 歳を超えたそうだ。被爆者の方から実際にお話を伺うことができるのは、私たちが最後の世代だと言われている。長崎の核兵器廃絶運動を長年牽引してきた二人の被爆者が、昨年、相次いで亡くなられたそうだ。二人は、戦争や被爆の体験がない人たちが道を間違えてしまうことを強く心配していたそうだ。式典の中での長崎市長の長崎平和宣言にあったように、平和な世界の実現に向けて、私たちにできることは必ずあるはずだ。今回の研修のように、実際に被爆地を訪れ、核兵器の怖さとその歴史を知ること。自分のまちの戦争体験を実際に聴くこと。戦争や被爆の体験は共有できなくても、平和への想いは共有できる。そうだ。その通りだ。核兵器のない世界と恒久平和の実現のために、「平和への想い」をしっかりと持ち続けていきたい。



< 長崎を見守り続ける平和祈念像 >

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園の中にどっしりと構える平和祈念像である。垂直に高く挙げた右手は原爆の脅威、水平に伸びた左手は世界の恒久平和を意味し、軽く閉じた目は原爆犠牲者の冥福を祈っているようだ。

8月9日午前11時2分。73年前、この地は一発の原子爆弾により、一瞬にして壊滅状態の焼け野原となってしまった。そして、たくさんの尊い命が奪われてしまったのだ。この大きな像の前に立ち、私は73年前を想像した。どんなに恐ろしかっただろう。どんなに苦しかっただろう。どんなに無念だっただろう。どれだけ想像しても足りるはずがない。そう分かっているけど、自分の中にある感情すべてを使って、精一杯考えた。人々の平和への悲痛な想いと祈りがひとつになったこの像は、現在に至るまで、人々の重く深い苦しみ、計り知れない努力、そして復興への果てしなく長い道のりをずっと見守ってきたのだと感じた。

この像にはあえて表情はないようだ。しかし私には、当時の想像を絶する悲しみを訴えるとともに、何不自由なく当たり前の生活を送ることができる現在の日常のありがたさを静かに物語っているようにも思えた。この平和祈念像が、これから先も平和を祈る象徴として、私たちをずっと温かく見守り続けてくれるだろう。

4 派遣研修に参加して感じたこと

戦争は、多くの人の命と大切なものを奪うこと。原子爆弾は、人間が人間らしく生きる尊厳を容赦なく奪い去る残酷な兵器であること。実際に自分の足で歩き、自分の目で見、自分の耳で聴くことによって、73年前にこの長崎で起こっていたことを肌で感じる事ができた。さらに、平和とは何かを深く考えさせられた。帰る家があり、待っていてくれる家族がいて、お腹いっぱいご飯が食べられること。欲しいものが手に入り、やりたいことに思う存分打ち込めること。今では当たり前のことが、どれほど幸せなことなのかを実感することができた。そして、いつも当たり前だと思っていたこの幸せな日常を大切に思うことこそが、「平和」へとつながる大事な一歩なのではないかと私は思った。

戦争や原爆を過去のことだと思っていけない。国連やICANの取り組みが大きく報じられている今現在も、世界には戦争をしている国があり、たくさんの核兵器を保有している国もある。それを忘れてはいけない。

今回、被爆地である長崎を実際に訪れる機会をいただいたことに、心から感謝したい。そして、この長崎派遣研修を通して学んだ「平和の尊さ」をしっかりと心に刻み、これからの自分たちの使命を胸に、未来の平和に向かって一歩ずつ力強く歩んでいきたい。

世界に平和を



郡山市立郡山第五中学校2年 横山 彩華

1 派遣研修への参加に当たって

私が戦争のことを知るきっかけとなったのは、祖父の話だった。祖父は戦争経験者で、何回か話を聞いたことがある。小学生の頃、ランタンだけの暗い部屋で生活し、郡山にも空襲があって、とても怖い思いをしたそうだ。だから、「戦争は絶対にしてはいけない」と言っていた。

核兵器のことを知ったのは、北朝鮮のニュースなどがきっかけで、つい最近のことだ。その後、小学校の歴史の授業で広島、長崎に原爆が落とされたことを知った。私は、戦争は怖いから、あまり知りたくないと思っていたが、怖いからこそ戦争を二度と起こさないように、私たち若い世代がもっと戦争について学ばなければならないと思い、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

私は、初めて長崎に行った。緑にあふれ、夜景がとてもきれいだった。73年前、見渡す限り焼け野原だったとは考えられなかった。

(1) 原爆資料館

原爆資料館には、原爆が落とされた瞬間の映像や当時の街の様子、被害に遭われた方々の写真が展示されていた。私は恐怖のあまり目を覆ってしまった。でも、いちばん怖かったのは被爆者自身だったと思う。

資料館に入ってすぐに、11時2分で止まった時計があった。その一瞬に全てが奪われた。全てを奪った「ファットマン」という原爆の模型があった。たった3メートルほどの大きさの原爆が何万人もの尊い命を奪った。もう二度と被爆者が出ないように、二度と原爆を落とさないでほしい。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムは、2日間開催された。1日目は、被爆体験講話やこじんまりワールドワークなどに参加した。

被爆体験講話では、当時4歳8か月で被爆された小峰秀孝さんから話を聞いた。その中で一番心に響いたのは、「人ではなく戦争と原爆を憎め。」という言葉だ。小峰さんは被爆し、両手、腹、足を火傷し、足は3回手術された。小学校では足が変形したことでいじめられ、いろんなあだ名をつけられた。小峰さんは、苦しくて「死にたい」と思ってしまっていたが、その時に母に言われたのがこの言葉だったそうだ。私はこの言葉に心を動かされた。小峰さんがいじめられたのは足のせいで、そうなのは原爆のせいだ。戦争が起きていなければ、いじめられることは無かったと思う。

2日目は、戦争が起こる原因を考えた。この活動は班で行われ、私が考えていなかったような意見なども出されていた。それを班でまとめ、戦争が起こる原因は「国などの集団がお金や資源、土地、地位などを欲しがり、奪おうとするから。」と考えた。その解決策は、「国同士でうまく話し合い、足りないものを貿易などで補い合って協力する！」ことだと考えた。私たちには、この解決策を実行するのは難しいけれど、平和への小さな想いで、平和は実現されると思う。



< 平和の泉 >

(3) 平和祈念式典

8月9日に平和公園で平和祈念式典が行われた。私は、原爆資料館で平和祈念式典に参列した。最初に被爆者合唱があった。その中で「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」という歌詞が何度も出てきた。私は泣きそうになった。被爆者の方々が「絶対に被爆者を作らないで」と思う気持ちが心に突き刺さった。

午前11時2分、私たちは黙とうをした。この一瞬で長崎が焼け野原になったと思うと、心が苦しくなった。こんなことがまた起きてはいけないと改めて思った。

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園にある「平和の泉」という。この泉は「水を、水を」とうめきながら亡くなった方たちの霊に水を捧げて、冥福を祈り、併せて平和を祈念するために作られた。この噴水は、平和の象徴であるハトの羽をイメージしている。今ではのどが渴いたらすぐに水が飲めるが、水が飲みたくても飲めずに亡くなった人たちがいたことを考えると、今、私たちがどれだけ幸せなのかが分かる。この幸せが永久に続いてほしいと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私はこの研修で、戦争は他人事ではないことが分かった。戦争は昔のことだから関係ないと思うのではなく、戦争を二度と繰り返さないよう学ぶことが、平和への第一歩だと思う。今、被爆者の平均年齢は82歳で、被爆者から話を聴けるのは、私たちの世代が最後かもしれない。だからこそ、実際に話を聴いた私たちが一歩踏み出さなければいけない。「戦争は絶対に起こしてはいけない」ということを訴え続けて、世界が平和になるようにする。これが私たち若い世代の使命だと私は思う。

73年目の長崎



郡山市立郡山第六中学校2年 田中直太郎

1 派遣研修への参加に当たって

テレビや学校の授業などで、広島と長崎に原爆が落とされ、たくさんの人々が命を落としてしまったことは知っていた。しかし、僕にはあまり関係のないことだろうと思っていた。

ある日学校から、「郡山市中學生長崎派遣事業団員募集」のお知らせが届いた。被爆地が伝えたい想いとは何だろう。現在生きていらっしゃる被爆者は、次の世代にどんなことを一番に伝えたいのだろう。そんなふうに考えたことが今までなかった。また、原爆が落とされたのがどれだけ悲惨な出来事で、どのような影響を与えたのかを実際に調べたこともなかった。

日本人にとって、平和の尊さや核兵器廃絶の必要性を学び、自分の目で確かめることは重要だろう。そして、平和祈念式典などの研修を通して感じたことを、他の人達に僕からも伝えられないかと思い、この「長崎派遣事業」に参加することにした。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

初めに、原爆が落とされた11時2分を指して止まってしまった柱時計があった。文字盤は反り曲がり、縁は崩れている。その時に起こった状況を物語っていた。

その先へ行くと、1945年8月9日午前11時2分、「ピカッ」と青白い閃光が目をくらませ、10秒ほどで長崎の街を破壊した原爆「ファットマン」の実物模型があった。外側の火薬でプルトニウムを爆縮し、中性子を飛び出させて核分裂を起こす。この原爆により、約17万9千人もの人々が熱線、爆風、家屋の火災、その後の放射線による後遺症などで亡くなった。生き

残った人々も苦しみながら生きている。プルトニウムの大きさは、野球ボールほどの小ささで驚いた。僕は怖くて見たくなくなった。

(2) 青少年ピースフォーラム

4歳の時被爆された、小峰さんのお話を聞いた。爆心地では太陽の表面と同じ3千度から4千度にもなったという熱線で、両手、両足、腹を火傷され、放射線によりケロイドの症状が身体に現れた。運動障害も現れ、横歩きになってしまった。「腐れ足」などと言われていじめられ、被爆者の中には、汽車にひかれたり首吊りをしたりして自殺する人もいたという。「人生は辛いことだらけ、それを乗り越えてほしい。」小峰さんは、「もう自分達のような『被爆者』になってほしくない、一刻も早く核兵器を廃絶してほしい」と願っておられた。

現在世界にある約1万4千発分の核兵器を、BB弾の落ちる音に見立てて聞いた。それは、とてもおぞましい音だった。

戦争の原因には食糧、環境、領土問題や人口増加などがある。それらは、お互いに愛情を持って話し、向き合えば、簡単に解決するだろうと他校生との話し合いで改めて感じた。

(3) 平和祈念式典

僕は、長崎原爆資料館の館内で式典に参列し、平和公園の模様を映像で見ている。

原爆が落とされた直後、被爆した人達は猛烈な熱さの中で、水を求めて亡くなった。せめてもの慰霊を込めて献水された清らかな水は、平和の泉や井水、湧水を長崎市内の東西南北から採水したものであった。

長崎平和宣言や平和への誓い、合唱を通して世界が恒久平和になることを願い、次の世代として僕達が受け継ぎ、世界へ発信させなければならないと思った。



＜ 平和祈念像 ＞

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園にそびえ立っている平和祈念像で、1955年に北村西望が造ったものである。僕は、この平和祈念像に込められた深い想いに感動した。

右手は、この地の約500メートル上空で原爆が爆発した高い空を指し、脅威を示している。左手は水平に伸ばし、平和でありたいと望んでいる。原爆が落とされた直後の長崎は静寂であったことから右脚は横になっており、左脚は立っていて救った命を表し、いざというときはすぐに立ち上がれるようにしたという。そして静かに目を閉じて犠牲者の冥福を祈っている。

このように、平和祈念像にはそれぞれ一つひとつの体の部位に違う意味が込められていることが分かった。これを知ってから改めて見ると、長崎の方々が望んでいる平和への熱い想いが伝わってきた。また、これほど力強い銅像を彫刻した北村さんの技術も素晴らしいと感じた。戦争は人を深く傷つける凶悪な行為だ。身近な人を亡くすよりも核兵器を無くしたい。誰もがそう思っている。

毎年、テレビの中継で何となく見ていた長崎の平和祈念像。実際に見ることのできた平和祈念像の、その空に向かって伸ばされた右手が、僕達の未来を指し、戦争という過ちを繰り返さないようにと訴えているようだった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

今回の「長崎派遣事業」を終えて僕達がやらなくてはならないことは、「何十年、何百年、何千年後までもこの悲劇を伝承し続けること」だ。もしも途絶えてしまえば、辛い歴史が繰り返されてしまうからだ。

原爆が落とされてから73年の月日が経過した。191の国と地域が参加している「核不拡散条約（NPT）」や2017年に採決された「核兵器禁止条約」が存在している一方で、核兵器の開発を進めている国がある。非常に残念で仕方がない。

被爆者の谷口稜暉さんは「核兵器と人類は共存できないのです。」と述べている。また、世界の人々も皆、平和で幸せに暮らしたいと願っているだろう。それらを実現するためには、現在持っていたり造ったりしている核兵器を今すぐに手放さなくてはならないと思う。

長崎を訪れて様々な研修に参加したことにより、原爆や戦争の恐ろしさ、長崎市民や被爆者の平和への想いなどを実際に体験することができ、とても良い経験になった。被爆地である長崎に行かなければきっと、先人が築きあげた現在の日本に感謝し、ありがたみを持つことはできなかっただろう。僕は日本人としてこの研修で学んだことを忘れず、核兵器が使われない平和な世の中にするため、一人でも多くの人に伝えていきたいと思う。

平和への願い



郡山市立郡山第七中学校2年 高橋優芽

1 派遣研修への参加に当たって

私は、小学校中学年の時に、被爆者の方から話を聴く機会があり、そこで初めて「戦争」と「原子爆弾」のことを知った。その時はまだ漠然としていて、「怖いこと」としてしか認識していなかった。それから、社会の授業などで、1945年8月6日に広島に、9日に長崎に「原子爆弾」が落とされ、日本は戦争に負けてしまったことなどを学び、私は、実際に「戦争」や「原子爆弾」と関わりがある場所や施設に行きたい、長崎の地で起こったことをもっと知りたい、そして、たくさんの人に伝えていきたいと思っていた。間もなくして、この長崎派遣事業の話をいただいた。私は、「チャンス」だと思い、参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

初めて訪れた長崎は想像以上に活気にあふれていた。そこからは、長崎に住むたくさんの人々の復興への強い想いが感じられた。

(1) 如己堂・永井隆記念館

ここでは、永井隆博士にまつわるたくさんの資料が展示されていた。医師である永井隆博士は、自らも被爆し、白血病と戦いながらも、負傷者の救護にあたった。寝たきりの状態に陥ってからも、「如己堂」という2畳一間の小さな家で、人々に平和と命の大切さ、原子爆弾や戦争の恐ろしさを伝えるため17冊もの本を書いた。「如己堂」というのは「己の如く隣人を愛せよ」という言葉から名付けられたそうだ。素敵な言葉だと思った。私は、自分の命をかけてでも救護活動や執筆活動に励んだ永井隆博士は、強い意志と平和を愛する心を持った素晴らしい人だと感じた。世界の人々にも、永井隆博

士の活躍を知ってもらおうと共に、平和の大切さを発信したい。

(2) 原爆資料館

原爆資料館には、11時2分で止まっている時計、熱線で溶けてくっついた6本の瓶、炭のように焦げて倒れている少年の写真など、正直、目を覆いたいと思うものがたくさんあった。その中でも、長崎の運命を変えた原爆「ファットマン」の実物模型が一番印象に残った。たった一発で7万人もの命が奪われたのである。長さ3.25メートル、重さ4.5トン。想像していたよりもとても大きかった。もしこれが今、空から落ちてきたらと考えた瞬間、頭が真っ白になり怖くてたまらなくなった。ここを訪れて、人の体や心など様々なところを傷つける原子爆弾や核兵器は、最もいらぬ物だと改めて感じた。一刻も早くこの世界からなくなってほしいと心から願う。

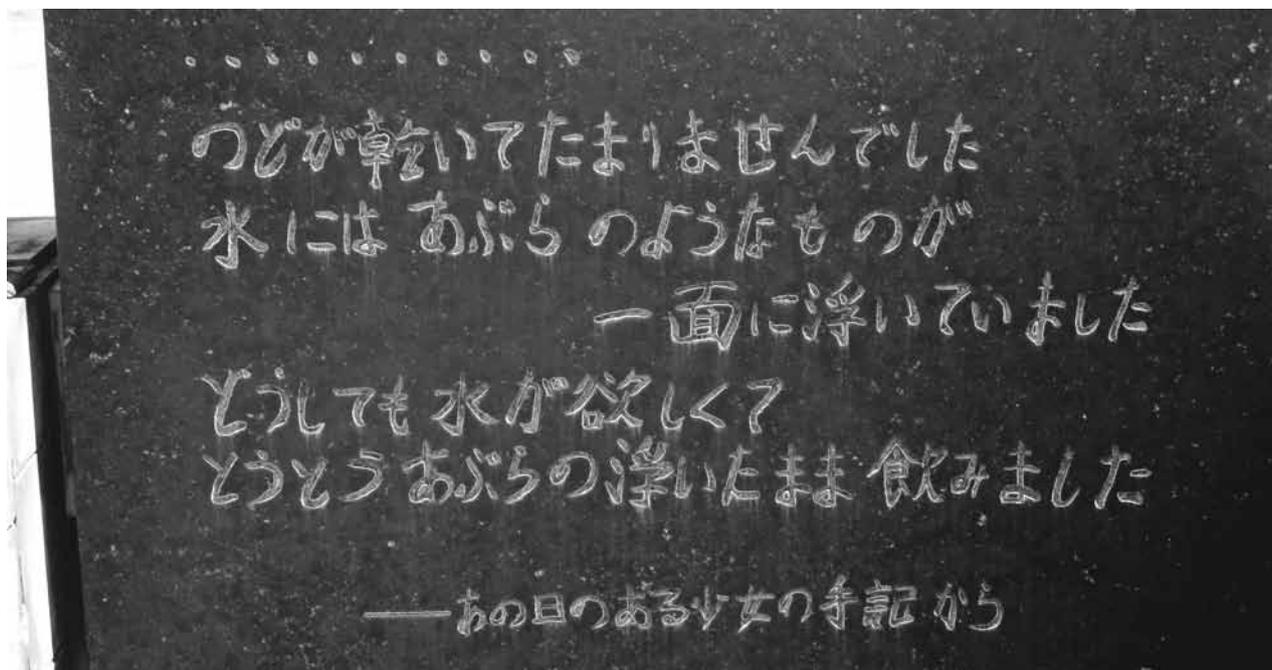
(3) 平和祈念式典

8月9日午前11時2分。私は、平和公園で平和祈念式典に参列し、1分間の黙祷をした。長崎の鐘が鳴り響く中、私は「戦争がいち早くなくなり、世界中が平和になりますように。」と心の中で何度も繰り返し唱えながら黙祷をした。

私は、被爆者の方々が歌われた「もう二度と」の合唱が心に残り、忘れられない。歌詞に、「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」というフレーズがあり、繰り返し歌われていた。その曲からは、被爆者の方々の強い想いが感じられた。

(4) 青少年ピースフォーラム

2日間にわたり開かれた青少年ピースフォーラムでは、全国から集まった学生と共に被爆者の方から貴重な話を聴いたり、ピースボラン



< 平和の泉 >

ティアの方々とフィールドワークを一緒に行ったりなど、様々な研修に参加し、有意義な時間を過ごすことができた。また、高校生や大学生がこのフォーラムを運営していることに驚いた。皆で協力して平和を作り上げていこうとする姿勢に感動した。

3 心に残ったこと

この写真は、平和公園にある「平和の泉」の正面にある石碑である。

「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

私は、この石碑の文を読んでとても衝撃を受け、苦しく悲しくなった。どんなに熱かっただろう。どんなに喉が渇いていたのだろう。まだ9歳の少女にこのような辛い思いをさせてしまった戦争や原子爆弾に、私は怒りを覚えた。そして、今ある「平和」が当たり前のことではなかったことを痛感した。これからは、「平和ではなかった日本」が「平和である日本」に変わったように、世界中の国々が「平和」の尊さを重んじていくことができるように、私はこの少女の言葉を胸に刻み、戦争の悲惨さと原子爆弾の恐ろしさを伝えていきたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は長崎派遣事業に参加し、原子爆弾や戦争の恐ろしさと悲惨さを、自分の目で見て、耳で聴き、心で感じ、頭で考え、体全体で学ぶことができた。73年前に落とされた原子爆弾がたくさん命を奪ったこと、未だに苦しんでいる人がいること。私は、「この事実を決して忘れてはならない。」と強く感じている。そして、中学生のうちに原子爆弾や戦争と向き合い、平和の大切さや命の尊さについて考えられたことは、とても貴重だった。

これからは、私達が想いを形にし、皆に伝えていく番だ。それが、この研修の最大の意味であり、私達に託された使命だと思う。今から地道に努力していけば、私達の想いが世界中に届いて、すべての悲しみがなくなり、本当に平和な日がやってくると私は思う。

今までは、生きていることが当たり前だと思っていたが、この研修を通して考えが変わった。これからは、家族や友達に感謝し、一つしかない命を大切に、毎日が有意義なものになるようにしっかりと歩いていこうと心に決めた。

最後に、4日間笑顔で過ごせたのは、友達やスタッフの方々が支えてくださったおかげである。また、研修中に会ったたくさんの方々にも心から感謝したい。

「ありがとうございました。」

平和を伝える



郡山市立緑ヶ丘中学校2年 須釜陽斗

1 派遣研修への参加に当たって

僕は、小学生の時に「戦争」について学んだ。その時はまだ戦争についてあまり考えていなかったの、「戦争は怖いもの」としか思っていなかった。その後、1945年8月6日に広島に原子爆弾が落とされたことを知った。しかし、長崎に落とされたことについては正直あまり知らなかった。

中学2年生になり、長崎派遣研修があることを知った。僕は、行くかどうかとても迷った。長崎に落とされた原子爆弾のことを知りたい気持ちはあったが、僕自身、人とコミュニケーションをとるのが苦手だったからだ。初対面の人だともっとひどくなり、全く話せなくなる。でも、二度と来ないチャンスを逃してはいけない、自分を変えたいと思い、参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 長崎原爆資料館

ここは、原爆に関する資料が多く展示されている場所だ。僕が一番印象に残っている写真は「黒焦げとなった少年」だ。僕は、この資料を見て言葉を失った。表現することが難しいが、原爆の恐ろしさを目の当たりにした瞬間だった。そんな地獄のような光景が辺り一面広がっていたと思うと心が痛み、ぞっとした。

他にも印象に残っている資料がある。それは、「11時2分で止まった時計」だ。これは、長崎に原爆が投下された時間で止まってしまった時計だ。それまで元気に生きていた人々が一瞬で亡くなってしまったと考えると、原爆は二度と使ってはいけないと改めて感じた。

(2) 平和祈念式典

原子爆弾が長崎に投下された日、8月9日に行われる平和祈念式典。私は本会場の平和公園で参列した。長崎市長の平和宣言の中の『戦争の文化』ではなく『平和の文化』を、市民社会の力で世界中に広げていきましょう。」という一文が特に心に残った。それは、今も世界各地で戦争が起こっている中、平和の文化を伝えることが世界平和への第一歩になると思ったからだ。

原爆が投下された午前11時2分、式典の参列者全員で黙とうを行った。平和の鐘が鳴る1分間、僕は心の中で「二度と戦争が起きませんように、そして、二度と核兵器が使われませんように」と繰り返し祈った。

(3) 青少年ピースフォーラム

僕は、この青少年ピースフォーラムの1日目の開会行事で、被爆者の小峰秀孝さんの貴重な被爆体験講話を聴くことができた。内容は「戦後の被爆者の生き方」だった。戦後、被爆者への差別があったという。小峰さんも、変形した足の指を見られていじめられていたと聞いた。その時小峰さんは、「人間が怖いと思い、自分は必ず自殺する」と思われたらしい。

数々の言葉の中で僕が一番心に残ったのは、「憎むべきは、番長（小峰さんをいじめていた人）やアメリカではなく、戦争である。」という言葉だ。この言葉には、「家族を失ったこと、原爆によって生きることが辛くなったこと、すべてが『戦争』のせいだ」という憎しみが込められているような気がした。小峰さんは「家族の愛情で生きている。」とおっしゃった。僕も、家族の愛情で生きていると思った。

あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか?…私達だ。
おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ。 (「花咲く丘」より)

Who turned the beautiful city of Nagasaki into a heap of ashes?
...We started the foolish war ourselves. (from "A Hill in Bloom")

아름다웠던 나가사키를 이런 잿빛 언덕으로 바꾼 것은 누구인가?...우리들이다.
어리석은 전쟁을 일으킨 것은 우리들 자신인 것이다. ((꽃 피는 언덕)에서)

是谁,把那个美丽的长崎,变成这样的灰烬?……是我们。
引起愚蠢的战争的,其实是我们自己。 (节选自「鲜花盛开的山丘」)

< 永井隆先生の言葉 >

3 心に残ったこと

この写真は、永井隆記念館に展示されていた物だ。永井さんは、「あの美しかった長崎を、こんな灰の丘に変えたのはだれか?…私達だ。おろかな戦争を引き起こしたのは私達自身なのだ。」と言っている。永井さんは、この言葉を伝えることで「戦争を起こしてほしくない」ということが言いたいのだと思った。この他にも、永井さんは数々の名言を残した。さらに、永井さんは白血病になりながらも原爆でケガを負った人の手当てをしたり、如己堂で被爆者として本を書き続けたりと、様々な平和活動を行った。

永井さんは、自分の病気を治すことよりも被爆者の命を守ることに努めた。永井さんのおかげで多くの命が救われた。僕は、その行動に心を打たれた。

なぜ、このような行動がとれたのか。それは、永井さんの思想であった「己の如く隣人を愛せよ」という言葉に表れている。この言葉には、「自分を愛するように、まわりの人を愛しましょう。」という意味がある。永井さんの隣人を愛する心が、被爆者を助けるという行動につながったと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

青少年ピースフォーラムでお話を聞いた小峰さんは、「新たな被爆者を出したくない。」とおっしゃった。その言葉は心の底からおっしゃっている口調だった。僕もこれ以上被爆者は出てほしくないと思う。また、「核兵器をハンマーで壊すことができるなら、核兵器を壊す『ハンマー』になってほしい。」ともおっしゃった。ここでの「ハンマー」は「世論」という意味である。つまり、「みんなには核兵器を壊す『ハンマー』として、核兵器の恐ろしさを世界中に訴え、核兵器廃絶に協力してほしい」のだと、自分なりに解釈した。そうだとしたならば、できる限りの協力をしたい。

今回の派遣研修で、「平和」とは、友達といつも通りに遊んだり体を動かしたりするなどの何気ない日常を送れていることだと知った。この「平和」が永遠に続くように、戦争について深く知ることができた僕が努力しなければならないと思った。

小峰さんが「戦争や原爆の恐ろしさを次の世代に伝えていくことが被爆者の役目」と話されていた。ならば、僕は「戦争や原爆の恐ろしさを友達や家族に伝えることが派遣者の役目」だと考え、この役目は責任をもって果たしていこうと思った。

人類の力の使い道とは何か



郡山市立富田中学校2年 大内 怜 奈

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日の悲劇。それは、私達の想像をはるかに超える凄まじいものだった。

私は以前、あの日長崎を襲った出来事を知り、学校・家族・地域にその事実を伝えたいと思っていた。そのため、今回の長崎派遣事業に参加したいと決意した。

戦争を経験した世代というと、ちょうど私達の曾祖父母にあたる。だが、私の曾祖父母は私が幼いころに亡くなってしまっているため、戦争について何一つ聴くことは出来ない。それならこの耳と目と心で直接触れたいと思ったのも、参加の動機の一つだ。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館（如己堂）

ここは、私達が最初に訪れた場所である。私は、研修に参加するまで永井隆博士を知らなかった。だが、ここで展示されているたくさんの資料を見て学ぶうちに、この小さな家「如己堂」から世界の平和を最期まで祈り続けた素晴らしい人であったということが分かった。

永井博士は、白血病に侵され、さらに自らも被爆しているにもかかわらず、原爆で負傷した人々の救護にあたったのである。それは、永井博士の思想だった「己の如く隣人を愛せよ」という言葉そのものであり、生きる力となっていたのではないかと思う。病状が悪化し寝たきりになってからも作家として精力的に執筆し、長崎の復興と平和を祈り続けたその姿は、たくさんの人々に希望と勇気を与えたのではないかと感じた。

(2) 平和公園

研修2日目に平和公園を訪れた。ここは、戦争を繰り返さないという誓いと世界平和への願いを込めて造られた公園である。

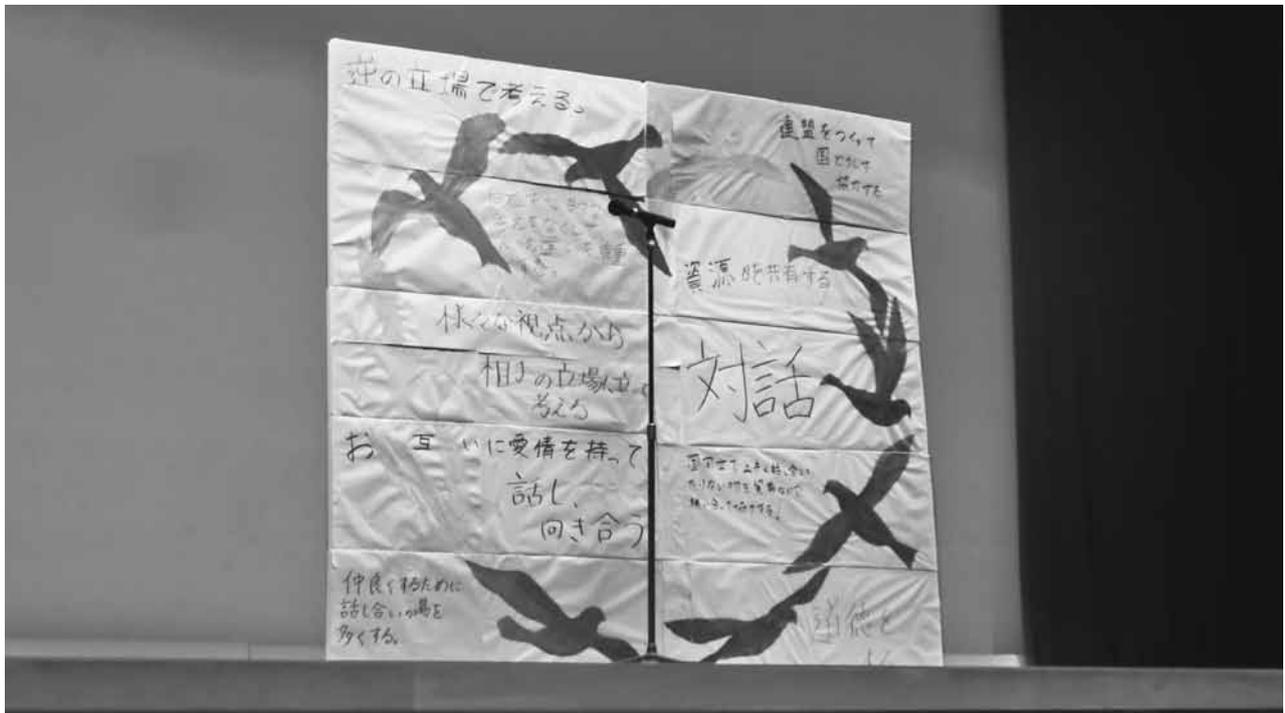
私がここで最も印象に残ったのは、平和祈念像である。テレビや本などで目にしたことはあったが、この特徴的なポーズには深い意味があるのだと、このとき初めて知った。天を指した右手は原爆の脅威を、水平に伸びた左手は世界平和を、横にした脚は原爆落下直後の長崎の静けさを、立てた脚は救われた命を、優しく閉じた瞼は戦争と原爆犠牲者の冥福を祈る姿を、それぞれ表していた。

「優しくも力強い平和祈念像は、戦争で疲弊した人々の心を今も癒し続けているのだろう」、そして、「雄大なこの祈念像は現在も、犠牲者の遺族や世界中の人々に『二度と戦争を起こしてはならない』と語りかけている」。そんなことを感じさせた。

(3) 長崎原爆資料館

長崎原爆資料館には、原爆での様々な被害が展示されていた。全身にやけどを負った少女の写真、ケロイドの模型、熱線によって溶けてしまったガラス瓶とそれに張り付いた指の骨など、痛々しいものばかりだ。

中でも特に印象的だったのは、長崎に投下された原子爆弾「ファットマン」の模型だ。全長3.6メートル、重さ4.6トンのプルトニウム爆弾である。模型ではあるが、見た目の印象からは想像もつかないほどの恐ろしい被害をもたらした兵器を目の当たりにし、この世の中から核兵器を無くさなければならぬと改めて心に誓った。



< 青少年ピースフォーラムにて >

3 心に残ったこと

今回の研修において最も印象に残ったのは、「青少年ピースフォーラム」である。ここで、全国各地の小学生から高校生が平和についての考えを深める活動を行った。グループに分かれ、「なぜ戦争が起こってしまうのか」や「戦争の解決策や戦争を起こさないためには…」などについて話し合った。

この写真は、その話し合いの結果をグループごとにまとめ、パズルを組み立てるように貼り合わせたものだ。様々な意見、提案が挙げられており、自分の視野も広がり参考になった。戦争体験者ばかりでなく、戦争未経験者である私達のような若い世代を含め、たくさんの人々が平和実現のために考え、実行し、伝えていくことの大切さを強く感じる事ができた。

さらに、この活動に参加させていただいたことで、全国各地から集まった学生と交流できたことも貴重な経験となった。たった2日間ではあったが、平和に対する考えを深め、同じ目的を持つ者同士で意見交換ができたことは大変勉強になった。

4 派遣研修に参加して感じたこと

一発の原子爆弾で約15万人の被害者を出したあの日。長崎の人々が感じた痛み、怒り、悲しみは計り知れない。さらに、その想いは犠牲者の遺族に受け継がれ、長崎の街の復興とは裏腹に、人々の心に癒えることのない傷として残ったままなのだ。

今回の研修を通して私は、今まで「平和とは何か」と考え見てきたつもりであったが、その根本的なものを知らなかったことに気が付いた。戦争や原爆投下など悲しい事実を深く知り、それをありのままに伝え、受け継ぎ、同じ過ちを繰り返すことのないよう、「戦争のない世界」の実現を考えることが平和への第一歩ではないかと思う。

人類はなぜこんな最悪の兵器を生み出してしまったのだろうか。造るのも、被害を受けるのも、捨てることのできるのも同じ人類であろう。ならば、深く考えずともその答えは簡単ではないか。

人類の力の使い道。それは、原爆投下のような深い悲しみのためではなく、永遠の世界平和のため核兵器廃絶の必要性を訴え、必ず実現させることではないだろうか。

平和な世界をつくるために



郡山市立大槻中学校2年 関根拓海

1 派遣研修への参加に当たって

73年前、広島と長崎に原爆が投下され、戦争が終わった。しかしそれは、原爆障害や放射線被害の始まりだった。

福島は、原発事故から7年が経過したが、放射線の影響に未だに苦しめられている。放射線が及ぼす影響や怖さ、核の恐ろしさを実際に目で見て肌で感じ、平和の大切さを伝えていくことが大切だと考え、派遣事業に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士は、放射線医師であったが白血病を患い、余命3年と宣告された。その後、原爆が落とされ被爆し重傷を負いながらも、負傷者の救護や原爆障害の研究に取り組んだ。

病状が悪化し寝たきりになった後は、如己堂という二畳ひと間の小さな家で原爆の悲惨さや平和の大切さを訴え続け、「長崎の鐘」や「この子を残して」など、17冊もの本を書き残した。

永井博士の平和を願い命の大切さを伝えようとする想いや行動力、その姿には大変感銘を受けた。私たちがすべきことは、相手を思いやることだと思う。助け合い、譲り合い、認め合う。まずは身近な人へ思いやりの気持ちで接してみよう。

(2) 原爆資料館

原爆資料館では、被爆したビンに触った。硬いはずのビンがねじれ、熱線のすさまじさが伝わってきた。

また、原爆投下直後の写真を見た。街だった場所は一面焼け野原になっていた。皮膚が焼けただれてはがれ落ちた人間の写真、全身が黒焦げとなった少年の写真など、目を背けたくなる

ものばかりだった。

そして、放射線の被害も目の当たりにした。抜け毛や嘔吐の症状が現れ、白内障、白血病、ガンなどを引き起こすことが分かった。

私はそれを知ったとき、「もし、自分の身にもそのようなことが起こったらどうしよう」と思った。福島に住んでいる僕たちにとって全く関係のない話ではない。怖さを知ることと、正しい知識を得ることが大切だと思った。

(3) 平和祈念式典

平和祈念式典の冒頭で、被爆者の方々による合唱「もう二度と」が披露された。「もう二度と作らないで わたしたち被爆者を」というフレーズが何度も歌われており、胸が締め付けられた。

平和祈念式典には、国連事務総長が現職として初めて参列した。国連事務総長は「核保有国には核軍縮をリードする特別の責任があります。」と伝えた。しかし、核兵器禁止条約が採択されてから1年になるが、核保有国はこの条約に反対している。日本を地球最後の被爆国にするよう、関係国が対話を重ね共に行動していくことが大切だと思う。

午前11時2分に黙とうを行った。平和の鐘が辺りに鳴り響いた。核兵器廃絶と平和を祈った。

3 心に残ったこと

この写真は、長崎に投下された原子爆弾の模型である。長さ3.25メートル、直径1.52メートル、重さ4.5トンで、ふっくらしたその形状から「ファットマン」と呼ばれた。初めて原子爆弾を見たときは、「あまり大きくないんだな」と思った。しかし、この一発の原子爆弾が猛烈



< 長崎に投下された原子爆弾 >

な爆風や熱線、放射線を放出し、一瞬にして人々の命を奪い、長崎を死の街にした。さらに、戦争が終わった今でも被爆により苦しんでいる方がいる。

それなのに、世界には1万5千発もの核兵器があることを知った。さらに、核兵器の近代化に巨額の資金をつぎ込んでいることも分かった。2017年には1兆7千億ドル以上のお金が武器や軍隊のために使われたそうだ。これは、世界中の人道援助に必要な金額のおよそ80倍にあたるらしい。

もしも世界中にある核兵器を使って戦争をしたら、人類が滅亡し、地球は壊れてしまうのではないかと思う。人間が人間として生きていくために、地球上には一発たりとも核兵器を残してはいけないと思った。

唯一の被爆国である日本から、核兵器の恐ろしさや戦争の悲惨さを伝えていきたい。そして、核兵器のない平和な世界を創りたい。

4 派遣研修に参加して感じたこと

「百聞は一見に如かず」であった。

教科書やインターネットなどで戦争のことを知っていたつもりだったが、今回の派遣に参加し、それが十分ではなかったことを知った。原爆の恐ろしさ、放射線の怖さ、命の尊さ、平和の大切さ。実際に自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じたことを伝えていくことが私たちの使命であることを実感した。

当たり前だと思っていた日常、帰る家があること、温かい食事があること、家族がいること…。そんな当たり前の生活が本当に幸せなことだと思えるようになった。この平和な日常に感謝し、相手を思いやる気持ちを忘れずに過ごしたい。

個々の小さな想いが、やがては世界の大きな想いとなり、世界平和へとつながると信じている。

平和への思い



郡山市立小原田中学校2年 橋本 茅乃

1 派遣研修への参加に当たって

2011年3月11日に東日本大震災が、福島では原発事故が起こった。その時、「放射線」という言葉を初めて聞いた。今回、長崎派遣事業に参加して、「原爆投下後の放射線による被害が一番怖い」と被爆者の方が教えてくださった。私達が経験した東日本大震災でも、放射線による被害は大きかった。

この二つの出来事の共通点として分かったことは、「放射線とは浴びてはいけないもの」ということだ。東日本大震災では、復興に長い年月がかかっている。長崎は、原爆という恐ろしいものが投下されたのになぜここまで復興できたのか、と疑問に思った。

私は、東日本大震災を経験して、長崎への原爆投下についてさらに知りたいと思い、長崎派遣事業への参加を希望した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館

永井隆博士は、自身も被爆しながら、被爆者の救護活動を行っていた。自分のことより他の人を優先して助けていたということは、とても素晴らしいと思った。

私が一番印象に残った言葉は、「己の如く人を愛せよ」という言葉だ。この言葉は、永井隆博士の思想であり、「自分を愛するように、周りの人を愛しましょう」という意味がある。戦時中は、差別が当たり前だった。永井隆博士は、そんな世の中に向けてこの言葉を送ったのではないかと思う。

永井隆記念館には、「平和」という言葉が大きな文字で掲示してあった。永井隆博士は、心の底から平和を願っていたのではないかと思う。

(2) 青少年ピースフォーラム

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の方の話やボランティアの方のいろいろな場所を案内いただいたりして、長崎について勉強した。

その中で一番印象に残ったのは、実際に被爆者を体験された方から直接話を聞いたことだ。実際に話を聴くことは、めったにできないことだと思った。被爆者の方の平均年齢は82歳を超えている。そのため、私達が聞いたことを身の周りの人や未来に伝えなければいけない。戦争や原爆投下のような恐ろしい出来事を二度と起こさないために。

(3) 平和祈念式典

平和祈念式典には、遺族の方々や総理大臣が参列していた。

遺族席を見ると、たくさんの方で埋め尽くされていた。私はその様子を見て、「これだけたくさんの方が原爆によって亡くなってしまったのだな」と思った。

原爆が落とされた午前11時2分になると、起立して黙とうを捧げた。小学生による合唱や被爆者の方々の合唱も披露された。長崎県に住んでいる本当に多くの人々が「平和」を願っているのだと改めて実感した。

式典では、外国人の方がスピーチをしていた。外国の方々も平和を願っている。それだけで世界は一つになれると思った。

私は、今回の派遣研修で経験したことや考えたことを、身のまわりの多くの人に伝えていきたいと強く思った。現在も未来も「戦争や原爆のない平和な世界にする」ということを。



< 平和への願い >

3 心に残ったこと

私が心に残った風景は、無数の「折り鶴」だ。平和祈念式典の会場には、数え切れないほどの色とりどりの折り鶴が、千羽鶴として壁一面に飾られてあった。しかし、その鮮やかな千羽鶴を見ていると、何か物悲しさを感じてしまった。それは、まるで原爆で尊い命を落とされた方々の姿や今なお原爆の後遺症で苦しんでおられる方々の姿を表しているようにも思えたからだ。

しかし、平和祈念式典が進んでいく中、その千羽鶴は、平和を思う世界中の多くの人たちの願いが込められている姿であると思えてきた。こんなにもたくさんの人が、「平和」を願っている。それはとても素晴らしいことだと思った。私は、その多くの人々の願いこそが、本当の「平和な世界」になっていく第一歩なのではないかと思った。

平和祈念式典の最中、私はずっと考えていた。「私が今できることは何なのだろうか」と。式典が終わる頃には結論が出た。特別なことではない。「多くの人に私の体験を伝えることが今の私にできることである」と感じる事ができた。

4 派遣研修に参加して感じたこと

研修を振り返って、特に「人の命の大切さ」や「平和の尊さ」については、とても重いものであると考えさせられた。

青少年ピースフォーラムで聴いた「原爆は恐ろしい兵器だが、それを作ったのも人間であり、それを使用したのも人間である。しかし、人間が作ったものは人間の手で壊すことができる。」という言葉がとても印象に残った。世界を本当に平和な世界にするのもしないのも、結局、人間の考え次第であると思った。

そのために、私達一人ひとりができることは何なのかを考えてみると、広島や長崎に起こった過去の事実をしっかりと知ることが大事であると思う。そして、学んだことを次の世代に必ず伝えていくことの大切さを学ぶことができた。

「人の命の大切さ」や「平和の大切さ」を、一人でも多くの人に伝え広めていくことは欠かせないことだ。まずは、家族や校内で、この体験を伝えていきたい。

核兵器廃絶を訴える



郡山市立宮城中学校2年 伊藤楓愛

1 派遣研修への参加に当たって

1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下され、一瞬で尊い命が奪われたということは知っていた。だが、その詳しい内容までは理解していなかった。

小学生の頃、原子爆弾についての資料や写真などを見た時、あまりにも恐ろしく、被爆当時の長崎の様子が頭から離れなかった。水を求めて川に入り、たくさんの人が亡くなってしまったのは有名な話だ。

被爆直後の長崎の様子や被爆者の訴えなどをもっと知りたい、自分で感じてみたいと思うようになった。

戦争により起こってしまった悲劇を皆に伝え、平和を願い、「核兵器廃絶」を訴えなければならぬと感じ、今私たちができることは何かを考えたいと思い、この研修に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

「永井隆」と聞いても、どのような人物で、どのようなことをした人なのか分からなかった。

ここには、彼の遺品や書画のほか、送られた手紙などがあり、大変な人生を送り、強く優しい人物だったことを知った。

彼は、放射線を浴び白血病を患いながらも、被爆した人々の救護活動にあたった。その後、白血病で倒れ、寝たきりの状態になりながらも、娘と息子と3人で如己堂に住み、たくさんの本を書き続けた。そして、たくさんメッセージを残した。その一つひとつに込められた意味が彼の平和への想いを表していて、原子爆弾による被害の恐ろしさを感じた。

私は彼の意志を無駄にしたいわけではない。だから、もっとたくさんの人にその意味を知ってもらい、平和を大切にしてもらいたいと思う。

(2) 長崎原爆資料館

スロープを降りて最初にあった、11時2分で止まった時計を見た瞬間、時が止まったように感じた。そして、ものすごい恐怖が私を襲った。形が崩れてしまった時計を見ていると、時計が泣いているように見え、悲しい気持ちになった。そしてここにあった書籍や写真、焼け残った物すべてが、被爆当時の長崎を物語っていた。

その中でも一番衝撃を受けたのは、黒焦げとなった少年の写真だった。その姿はあまりにもひどく、最初に見た時は黒い塊にしか見えなかった。きっと苦しみや熱さを感じる暇などなかったのだろう。他にも同じように亡くなった人が大勢いて、一瞬で命が奪われたかと思うと胸が痛い。

被爆によって今でもつらい思いをしている人がいる。心も体もボロボロになってしまうことがどんなにつらいことか、痛くて悲しいことか。被爆していない私たちでもそう感じ、もう二度と原子爆弾が使われるようなことがないようにしたいと強く思った。

平和について改めて考えさせられた。

3 心に残ったこと

ずんぐりと丸みのある形をしていることから、“太っちょ”という意味で名付けられた原爆「ファットマン」。激しい閃光、猛烈な轟音、爆風の3つが長崎を襲った。地表面の温度は約4,000度にもなり、小さな太陽が落ちたともいえるほどだ。



< 長崎型原爆ファットマン >

私は、原子爆弾が小さな命や罪のない人々の命を奪ったことに強い怒りを覚えた。また、一発の原子爆弾により一瞬で長崎の街は変わり果て、いくつもの命が消えたのだと思うと、怖くて仕方がなかった。

核兵器を所持している国がまだ10か国以上あり、1万5,000発あると言われているが、できるだけ他の国に情報を知られないようにしているため、核兵器の実態は正確にはわかっていない。

もうこれ以上、原子爆弾による被害が出てほしくないと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

4日間を振り返って、たくさんのことを学ぶことができ、この研修に参加して本当に良かった。

研修前は、「戦争や原子爆弾は自分には関係

ない」と思っていたが、戦争や原子爆弾の実態を知った時、他人事とは思えなかった。なかなか得ることのできない貴重な経験ができ、自分の考え方を考え、持っていた偏見を捨てることができた。

「平和が普通」という考えがあり、戦争や原子爆弾について深く考えたことがないという人が多い。だから今、核兵器廃絶の必要性、平和の尊さ、戦争の悲惨さを考え、もっと興味を持って自分のできることを考え、行動してほしい。

戦争の原因はたくさんあるが、その一つひとつを考えてみると、小さな問題が積み重なって起きている。一気に解決することはできないが、その一つひとつの問題に真剣に向き合っていくことが大切で、私たちが今できることだと思う。

二度と戦争を起こさないように、これからも平和について考え、核兵器廃絶の必要性を伝え続けていきたい。

核兵器のない平和な世界へ



郡山市立御館中学校2年 横田大晃

1 派遣研修への参加に当たって

私は戦争のことを学校の授業で学んだが、詳しくは知らなかった。しかし、先日、テレビで1945年8月9日に長崎に原子爆弾が投下された後の光景を見たとき、あまりの悲惨さに心が痛んだ。失われなくてもよかったたくさんの命が奪われたと思うと、戦争は二度と起こしてはいけないと強く思った。そこで、今生きている私たちが次の世代に戦争の恐ろしさを教え、伝えていかなければならないと思い、今回の長崎派遣事業に参加した。

2 派遣研修に参加して

(1) 永井隆記念館・如己堂

如己堂は、原爆で自分自身もけがを負う中、医療活動にあたった永井隆博士にカトリック教会の仲間たちが贈った、たたみ2畳ほどの小さな家だ。博士は、聖書の中にある「己の如く隣人を愛せよ（自分を愛するように、まわりの人を愛しましょう。）」という教えから「如己堂」と名付けた。

永井隆博士は、37歳の時に慢性骨髄性白血病になり、余命3年と宣告された。その年の夏、原子爆弾が長崎に投下され、右側頭動脈を切断し、出血をしながらも3日間救護活動に参加した。その後寝たきりになり、仲間たちが作ってくれた「如己堂」に移り住んだ。永井隆博士は、「ここで寝たまま病が進行して体が動けなくなったとしても、唯一動く手を使いたい」と、原爆についての研究を行い、43歳で亡くなるまでの6年間で17冊の平和に関する本を書き、原子爆弾のおろかさ、「いのち」と「平和」の大切さを訴えた。

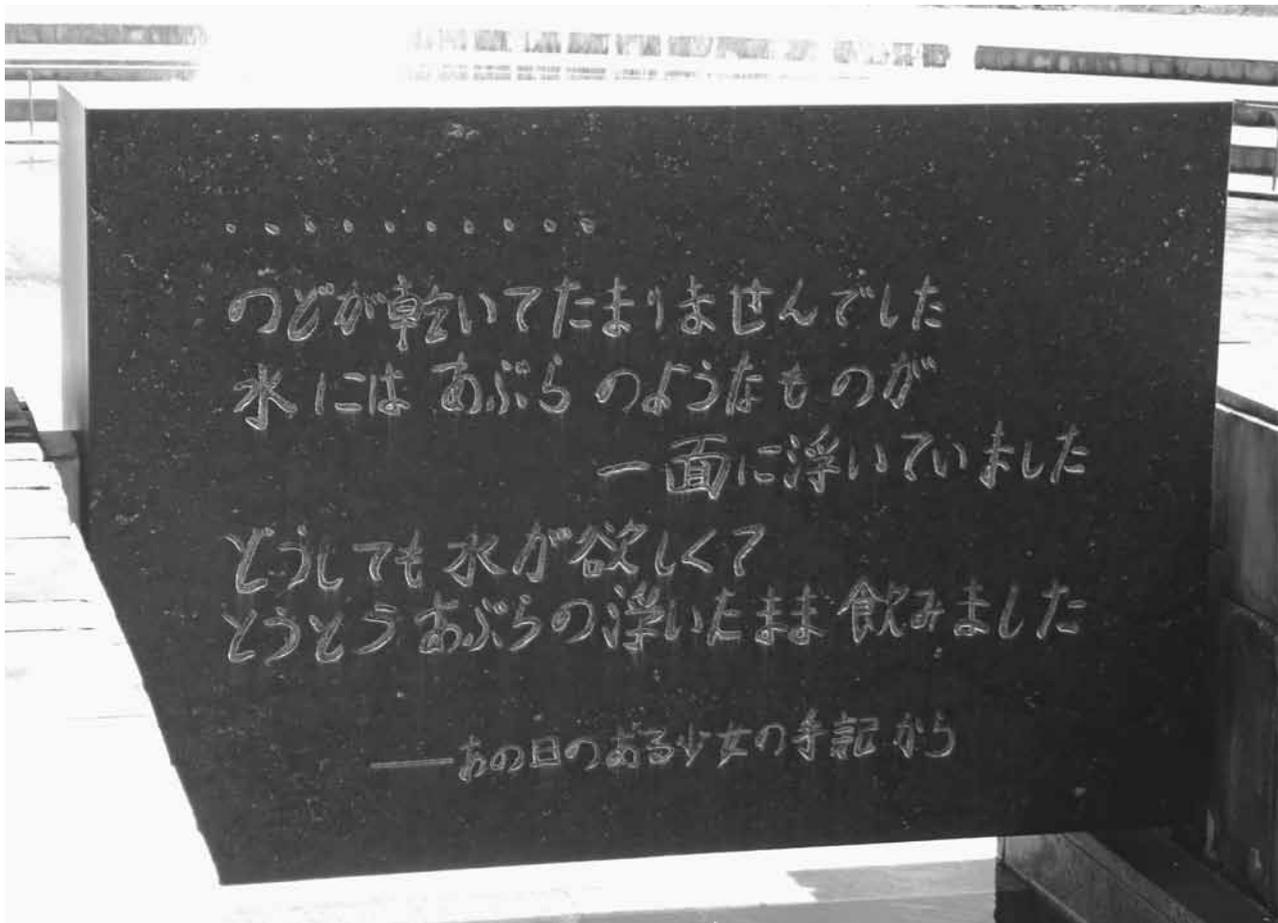
永井隆記念館に展示してあったメッセージの

中で心に残ったのが、「けんかにせよ、闘争にせよ、戦争にせよ、あとに残るのは後悔だけだ」という言葉だ。この言葉に共感した。戦争をしたとしても犠牲者が出るだけであり、良いことなど何一つないからだ。私は、永井隆博士のことを知り、平和の大切さを必死に伝えた姿に感動した。その思いを受け継ぎ、戦争を起こしてはいけないということを私たちが伝えていかなければならない。

(2) 平和祈念式典

私は今回、平和祈念式典に参列した。長崎市長や国際連合事務総長のアントニオ・グテーレスさんの話を聴き、改めて平和の大切さを知った。そして、児童合唱で「あの子」が披露された。「ああ あの子が生きていたならば」という歌の最後の歌詞を聴き、亡くなってしまった家族への思いが伝わってきた。

式典が進んでいくと午前11時2分になり、みんなで黙とうをした。73年前にこの長崎に原子爆弾が投下され、瓦礫だらけに変わってしまった光景が目につかび、心が痛んだ。私がもし被爆したら、原爆症の症状がいつ出るかわからない不安で、毎日安心して生活が送れないと思った。亡くなった方がどんな気持ちで亡くなっていったのかと思うと、言葉にならない。そのような思いを繰り返さないように、「これから先、核兵器が存在しない平和な世界を作っていきたい」と思った。



< 平和の泉 >

3 心に残ったこと

私は、「平和の泉」が心に残った。

原爆犠牲者を悼み、世界平和を祈念しようと、長崎市などが全国からの浄財をもとに建設し、1969年に完成した。正面の碑には「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて どうとうあぶらの浮いたまま飲みました」と刻まれている。これは、被爆当時9歳だった山口幸子さんの被爆手記の一節だ。幸子さんら長崎市立山里小、山里中の子どもたち約40人の体験をまとめた被爆体験記「原子雲の下に生きて」の中にある。この体験記は、被爆から4年後に、永井隆博士の呼びかけでまとめられた。

今の平和な世界があるのは、一人ひとりが協力し合って被爆体験を受け継ぎ、平和の大切さをみんなに知ってもらえたからだと思う。

4 派遣研修に参加して感じたこと

日本は今、平和であると思う。その平和の裏には、広島と長崎に落とされた原子爆弾の惨禍があることを忘れてはいけない。核兵器による被害がこれ以上起きないように、実際に被災地である長崎に足を運び肌で感じて、核兵器や戦争の恐ろしさを知ることが、私の中での平和の第一歩だと考えている。

そして、この研修を通して学んだ平和の尊さや核兵器の恐ろしさを、長崎派遣事業報告会やビデオ、ポスターなどを通して、一人でも多くの人に伝えていきたいと思う。

被爆者の声



郡山ザベリオ学園中学校2年 小林 瑚 雪

1 派遣研修への参加に当たって

私は、戦争について本当に何も知らなかった。国語の授業で戦争の話があった時も怖くてあまり聞いていなかったのので、原爆が投下されたのがいつなのかも知らなかった。私が、先生から長崎派遣事業の話聞いたとき、何も知らない自分が行ってもいいのだろうか、長崎に行っても何か学べることはあるのだろうか、と多少不安があった。それから私は、原子爆弾のことや長崎のことについて調べ始めた。資料には、長崎のことについて何も知らなかった私には衝撃すぎる事実が書かれてあった。ある程度調べてみて、私は、実際に長崎に行き、学んだことを家族や学校の友達などに伝えなければならないと思い、長崎派遣事業に参加することを決意した。

2 派遣研修に参加して

(1) 如己堂・永井隆記念館

如己堂は、生前白血病と闘っていた永井隆博士が、執筆活動を行っていた2畳ほどの小さな家だ。永井隆博士は、当時医者だった。白血病でありながらも、原爆で負傷した人々を救護した博士に感謝の気持ちを込めて、人々は博士に如己堂を贈った。「如己堂」という名前は、キリスト教信者だった博士が、「己の如く人を愛せよ」という聖書の言葉からつけた名前だ。

永井隆記念館には、博士の一生がまとめられたパネルや、賞状が展示されていた。博士に関する動画も観ることができた。

白血病と闘いながらも、たくさんの人々を診察し、執筆活動をした永井隆博士。他人のことを考え、自分のできることを探して行動を続けた博士の生き方に感動を覚えた。

(2) 平和の泉・平和公園

被爆者は、「水を」「水を」と叫びながら亡くなっていった。平和公園にある平和の泉は、核兵器禁止世界平和建設国民会議と長崎市が、犠牲者の霊に水を捧げ冥福を祈るとともに、世界恒久平和を祈念するために建設されたそうだ。

平和公園には、平和祈念像と各国から贈られた33個の石碑が飾られていた。その中には、アメリカから贈られた石碑もあった。その石碑は、何人かの男性が手を取り合っているものだった。アメリカからも石碑が贈られているということを知り、私は、平和が近づいてきているな、と思った。

(3) 青少年ピースフォーラム

8月8日と9日の2日間にわたり、私たちは青少年ピースフォーラムに参加した。

1日目は、主に平和学習とこじんまりフィールドワークを行った。平和学習は、平和会館ホールで行われ、実際に戦争を体験された方の話を聴いたり、「城山国民学校の物語」という戦争中の一人の教師の物語を聴いたりした。こじんまりフィールドワークでは、屋外の4つの場所をまわった。夕方には交流会も行われた。初対面の人たちとの会話はとても緊張したが、充実したひとときとなった。

2日目は、平和祈念式典への参列と、平和学習を行った。平和祈念式典では、被爆して亡くなられた方々と繋がったような気持ちになった。平和学習では、戦争や争いが起こる原因とその解決策についての意見交換を行った。

青少年ピースフォーラムは、自分の考えを広げる良い機会となった。平和祈念式典へ参列することもでき、貴重な体験をすることができた。



< 平和の泉周辺のタイル >

3 心に残ったこと

これは、平和の泉周辺のタイルの写真だ。このタイルには、赤い部分と白い部分がある。赤い部分は、原子爆弾が投下されて火の海に染まっている長崎を表しているそうだ。私はこの話を聴くまではタイルを見ても何も思わなかったが、話を聴いてぞっとした。自分が当時の長崎にいるような感覚を覚えたからだ。周りを火で囲まれて、逃げ場を無くした被爆者の方たちの様子が目に見えるようだった。両親と離れなければならないようになってしまった子どもや、飼い主の姿を見失って行き場を無くしてしまったペットなど様々な生き物の思いが、一気に自分の脳内に流れ込んできた気がした。私は、次の場所に移動するまで、ガイドの方の話も聴かずに、ただ呆然とタイルを見つめていたような気がする。

このタイルを見ると、当時の長崎の光景の痛々しさや、被爆者の方たちの「水を」「助けて」という声を感じられるような気がしないだろうか。きっと、平和の泉に行っても、タイルまで気にする人はなかなかいないだろう。私も、話を聴くまではただのタイルとしか思っていなかったし、特に意識もしていなかった。しかし、話を聴いて、細かいところにも被爆者に対する思いが込められているんだな、と思った。

私は、ここでも原爆犠牲者のご冥福を祈った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

派遣研修に参加した4日間で、私は、たくさんの被爆者の声を聞いたような気がする。実際に聞いたのは、青少年ピースフォーラムで聴いた話だけだが、平和祈念式典や平和の泉、如己堂でも、被爆者の声が聞こえたような気がした。

今回、青少年ピースフォーラムの2日目の平和学習で行った意見交換で、自分の考えをさらに広げることができた。私は、戦争が起きる原因は「各国の強さの自慢」だと思っていた。しかし、「宗教の違い」や「話し合いで解決するという考えがない」など、自分が考えもつかなかったような意見も出ていた。

また、私は、戦争の解決策は「国同士が認め合うこと」がベストだと思っていた。しかし、「物資を共有すること」や「謙虚な心を持つこと」なども挙げられていて、自分とは違う考え方に触れることができた。

私は、今回の派遣研修で学んだ新たな知識も含めて、家族や周りの友達だけでなく、戦争を知らない他の人たちにも原子爆弾による被害の悲惨さなどを伝えていきたいと思う。そして、被爆者やその家族の方たちの思いも語り継いでいきたい。

平和への道 これからもずっと



郡山市立西田学園8年 鈴木 英一郎

1 派遣研修への参加に当たって

私は、広島と長崎に原子爆弾が落とされたことを、小学校の授業で習い、初めて知った。しかし、その時は、広島と長崎にどのような被害をもたらしたかということは全く知らなかった。

73年前、8月9日午前11時2分に落とされたたった一発の原子爆弾。その瞬間、辺り一帯が焼け野原となり、たくさんの尊い命が失われた。しかし、私が知っている事実はほんの少しである。

この「ナガサキへのメッセージ・長崎派遣事業」で、もっと「平和」について学ぶべきだと思い、参加を決意した。そして同時に、福島第一原発のことが頭に浮かび、放射線による被害や復興を目指す姿など共通点が多い中、多くの人々が苦しんでいるという事実を伝えなければいけないと思った。

2 派遣研修に参加して

初めて訪れた長崎の街は、自然に囲まれたとても活気あふれる元気な街で、原爆が落とされたとは思えなかった。しかし、実際にこの街に原爆が落とされたと考え、とても心が痛かった。

(1) 如己堂・永井隆記念館

永井隆博士は、長崎医科大学（現長崎大学医学部）で放射線（レントゲン）の研究・治療をしていた医学博士で、戦争中に原爆で自らも被爆し、白血病にかかりながらも、人々のために救護活動を行った人物だ。

如己堂は、そんな永井博士のために作られた、たたみ2畳半ほどの小さな家だ。この家を見たとき、人々の永井博士に対する感謝の気持ちが伝わってきた。そして、記念館には、永井博士

の人生が収録されたビデオや、永井博士が書いた絵本、紙芝居など、たくさんの資料が置いてあった。

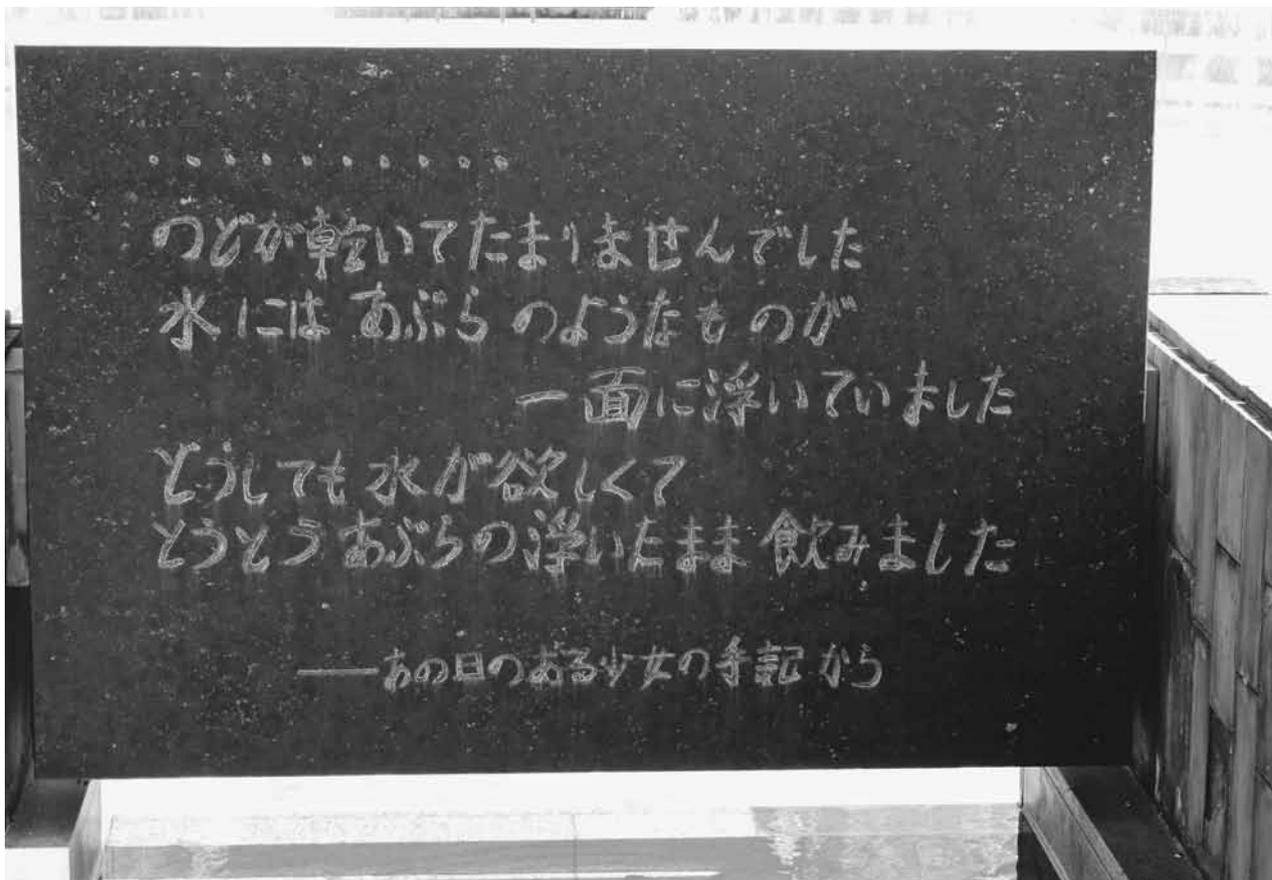
2階には、小さな図書館があった。そこには、永井博士が子供たちのために集めた数多くの本などがあった。子どもたちを愛する永井博士の気持ちが伝わってきた。

(2) 青少年ピースフォーラム

8月8日、9日の2日間にわたり開催された青少年ピースフォーラムでは、全国から学年を問わずに集まった同じ思いを持つ仲間と一緒に、平和に関する自分の気持ちを伝え合うなど意見交換を行った。

1日目は、被爆体験講話として、小峰秀孝（こみね ひでたか）さんのお話を聴いた。小峰さんは、わずか4歳8か月の時、爆心地より1.5キロの自宅近くの畑で被爆された。両手、両足、腹を火傷し、3回もの手術を受けられた。今は語り部として活躍しておられる。小峰さんのお話によると、73年前、当時の長崎市の人口はおよそ24万人で、そのうち15万人が被害を受けた。小峰さんは、被爆してすぐに小学校に入学したが、いじめを受け、自殺したいと思われたそうだ。だが、母から言われた「生き残れ」という言葉を支えに、今まで生きてこられたそうだ。講話の後、小峰さんは、「その体になったことを恨んでいますか？」という質問に対して、「むしろ誇りに思っています。」とはっきりおっしゃった。私から見た小峰さんは、被爆を経験したという事実にも負けず、むしろ自信に満ち溢れていたように見えた。

2日目は、全国から集まった仲間と一緒に、戦争の原因について話し合ったり、全体発表をしたりした。



< 平和の泉 >

この青少年ピースフォーラムは、全国の仲間と一緒に何かを作り上げていったような感じがして、とても貴重な良い経験になった。

3 心に残ったこと

上の写真は、平和祈念式典の会場である平和公園内にある、「平和の泉」の正面の石碑である。この石碑には、

「のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました
—あの日のある少女の手記から」

と刻まれていた。原爆が落とされた瞬間、いったいどのような環境にいたのか。そう考えるだけでとても胸が苦しくなった。

そして、この少女が経験したような出来事は二度と起きてほしくないと心から思った。この泉に向かい、核兵器廃絶と世界中の平和を祈った。

4 派遣研修に参加して感じたこと

私は、今回の長崎派遣事業を通して、原爆の悲惨さ、平和の大切さを感じた。そして何よりも、戦争は絶対に起こしてはならないと改めて感じる事ができた。貴重な経験を積むことができた実のある4日間だった。

73年前、たった一発の原子爆弾でたくさんの人々の命が失われた。核兵器による被害者がもうこれ以上出ないでほしい、そして、決して出てはいけなかった。しかし、世界には約14,900発の核弾頭があるとされている。そのことを考えると、世界に向けて核兵器廃絶運動をしなければならないと思った。これは、広島・長崎の人たちがやるのではなく、日本に住む全員の思いが必要である。同時に、私も他の人たちに呼びかけていかなければならないと思った。

私は、この長崎派遣事業に参加し、学んだことで、これから先ずっと、「平和」という言葉を胸に進んでいかなければいけないと強く感じた。また、「世界の平和」を願い続けたい。

【表紙に掲載されている祈念碑】



「長崎の鐘」(平和公園)

原爆投下後33回忌となる1977年に、遺族や被爆者およそ21,000世帯の拠出金により建立された。原爆殉難者の冥福を祈り、世界の恒久平和への願いが込められている。

「浦上天主堂遺壁」(爆心地公園)

爆心地から約500メートルの場所にあった教会「浦上天主堂」は、原爆による爆風で破壊された。この遺壁は、天主堂南側の壊れて残った壁の一部を移築したものである。



「原子爆弾落下中心地碑」(爆心地公園)

この碑がある長崎市松山町の上空約500メートルで原爆が炸裂した。塔の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には、爆死された方、被爆者でその後亡くなられた方々の氏名(複製)が奉安されている。

「クローク・オブ・ピース(平和のマント)」(平和公園)

ニュージーランド政府及びニュージーランド国内6都市から、友好の証として2006年に寄贈された。「マント」は平和な世界に身をゆだねる人々の一体感と、それらを包み込み、守るものを象徴している。



「未来を生きる子らの像(ふりそでの少女像)」(原爆資料館屋上)

京都府綾部市立綾部中学校の生徒たちが中心となり、1996年に建立された。原爆により亡くなり、晴れ着姿で火葬された二人の少女の姿の銅像。

「戦災復興記念」(平和公園)

大半が焦土と化した長崎の復興を目指し、1946年9月の「戦災復興計画基本方針」に基づき復興土地区画整理事業に着手、28年余の歳月を費やし完了。都市再建の記念碑として1975年に建立された。



「原爆殉難教え子と教師の像」(平和会館前)

原爆で亡くなった児童・生徒の慰霊のため、1982年に教職員らによって建立された。上に立つ巨人は原爆の脅威を振り払おうとする姿を、下の子どもたちは平和を叫ぶ姿を表している。

平成30年度 郡山市中學生長崎派遣事業
「2018 ナガサキへのメッセージ」報告書

発行日 平成30年11月17日
発行者 郡山市・平和を考える市民の集い実行委員会
(事務局：郡山市総務部総務法務課)

〒963-8601 郡山市朝日一丁目23番7号
電話：024-924-2031
FAX：024-924-0956
Eメール：soumhoumu@city.koriyama.lg.jp

印刷 郡山市総務部総務法務課

